昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
昭和五十年二月二十五日印刷
昭和五十年三月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻五七四号

川柳塔

座談会・柳界二匹の鬼

No. 574

三月号

川柳塔社同人の
胸にかがやく
シンボル・マーク

一個千円（桐箱入り）　送料本社負担

● 川 柳 塔 社　同 人 句 集 ●

『 川　柳　塔 』

頒 価 1500円　　送 料 160円

豆に追われ精薄に似た鬼の貌

よくよくの破目　裸か木の貰い泣き

負けぶりのよさをせめての媚びとする

倒産ときまればひとまわり派手に見せ

心底を見せぬ悲しみ二重顎

中島生々庵

さあやるぞ

機会を得て2月3日、東京にいたので浅草の観音さまにお詣りした。浅草寺詣りは戦後になってからは三回目であるが、今度は好天気に恵まれた豆撒きの日に、老妻や孫をつれて仲見世の石畳をぶらぶらと本堂に近づいてゆくと、私にとっては全く別の次元の世界である。すがすがしく紅白でしつらえた仮舞台が本堂の左手に設けられていて、年男で豆撒きに出場予定の有名芸能人の名前が張り出されている。そんな人に関連ありそうな、イキな姿で、雪駄にのせた真っ白い足袋も印象的にゆききしている。本堂に入ると一ぱいに人いきれする中に不思議な静けさが漂うている。何か一心にお祈りする気負いでもあろうか。正面に立って合掌すれば『ほんに今夜は節分か……』と小唄の文句が頭を横切ってゆく。炒り豆を頂いて孫の家に帰り勇ましく豆撒きをやる。つめたい風もほろよいの心持ちよくうかうかと、愈々明日から「春」だ。新幹線の響きも軽く大阪へ帰って来た。

座右の句

夕ざくらとんぼ返りがしてみたし　（路　郎）

私の句

チヤイコフスキーの甘さもの憂し老いの坂

阪上十止庵

川柳塔三月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

さあやるぞ……中島生々庵…（1）
峯　寺……正本水客…（2）
誹風柳多留廿五篇研究……（五）……（26）
清　博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原　亮
鈴木　黄・室山三柳・入江　勇・岡田　甫
川柳塔（同人作品）……中島生々庵選…（4）
水煙抄……川村好郎選…（30）
麻生路郎物語……（3）……東野大八…（23）
秀句鑑賞……（同人吟）……浜田久米雄…（28）
……（水煙抄）……正本水客…（29）
生駒から……麻生葭乃…（44）
近　作……諸家…（22）
百人一首と川柳…（9）……冨士野鞍馬…（42）

峯　寺

正本水客

春になると山陰の川柳会がある。去年も招かれて出掛けた前夜を山中に床しく佇む峯寺（みねじ）に泊めて戴いた。ひなびた茅葺の山門をくぐると白い木蓮の花が微笑みかけてくれる。奥庭には空をおおうように桜の大木が一本だけある。蕾はまだ固かったが、その横に新しく建てられた茶室でお茶を戴く。茶室はすべて、この山中で自生した材料で作られており、住職さんは茶道の家元である。私も宮本武蔵流に度胸を決める。

無作法にお茶を戴く桜かな

夕食には専門の料亭などでは味えない奥様心尽しの精進料理が出て私はすっかり嬉しくなって了った。箸紙は出雲紙を畳んで薄墨で「春雷に」と書かれてある。春雷に楽しき話ふと途切れなどと付けてみたが、どうも物にならない。

箸紙に上の句があり旅なごむ

桜の梢をかすめて春の月が上る頃、客殿の方から琴の音が響いてきた。音色は少したどたどしいが一途の心がこもっているように思えた。折から果物を持ってきて下さった奥さ

柳界二匹の鬼……（座談会）……（36）
時実新子・定金冬二・中尾藻介・岩井三窓・窪田久美子
三井酔夢・有信新之助・板尾岳人・橋高薫風
女の句……菊沢小松園……（41）
ざっぴつ……（45）
中川晃男・永宗宗義・西出一栄・西田恭子
雅号ぶっちゃけばなし……原田明春……（59）
初歩教室……本田恵二朗……（50）
大萬川柳「タイミング」……川村好郎選……（52）
柳界展望……（54）
本社二月句会……（庸佑・整理）……（56）
各地柳壇（佳句地10選）……植山武助……（60）
「勧　誘」……藤村〆女選……（48）
一路集「ネ　ジ」……西出一栄選……（48）
「　帯」……高橋操子選……（49）
編集後記……（一三夫・葉子）……（65）

座右の句

張り替えた障子の中に母います　（栞）

私の句

満月の地蔵の胸に眠りたし

高橋夕花

まに聞いてみるとこうである。

アメリカの加大学の学生16人が6ヵ月間、国外に学校を移して日本に来ているのだという。茶、花、料理、焼物、農業、紙等等の古い日本の文化が集まっている所として出雲地方が選ばれた。互に頼り合ったり英語で話したりするのを防ぐために寺や旧家などが必ず一名ずつを預かっている。峯寺に来ているのはジャンという女の子で、日本名は慈庵と自分で名付けていると云う。琴の主も判明した。

琴の音もとだえて月も上りきり

寺では始めソファでも置こうかと考えたが学生達は日本語はもちろん、箸の使い方、日本の便所のことなど、みな実地に練習を積んできているという。寺には水洗トイレもあるのに、一番古い昔からの厠へしか彼女は行かない。

日本人でも一生かかる茶道を半年ぐらいでと云えば、先ず経験することが第一ですと、その眼は真剣そのものである。足が地に着いているアメリカとは矢張り恐るべき国であると沁々感じた。

朝の膳には色あざやかな茶の花の茎を何気なく切って箸置にしてある。私は負けたなと思った。

箸置は菜種の茎で春の膳

茶室の横に幹も殆ど空洞になった紅梅が美事に咲いていたのが、朝には私を見送ってくれるかのように散り急いでいた。

老梅の命のかぎり咲いて見せ

ゴルフ場豆を植えたらなとながめ
遂に助からず賽銭疑われ
忘却の流れは独り寝にも馴れ
住む人はみんな貧しく雪の屋根
冷凍になって吹雪とやって来る

青森市　工藤甲吉

お目出たい座敷へ孫もかしこまり
老境はまだまだという数え年
仕事着の汚れ目立たぬままに過ぎ
事なかれ主義でもニュースだけは聞き
着ぶくれて冬の寒さは底と知る

岡山県　浜田久米雄

曲水つくる　米のとぎ汁
祝儀袋の　色も初春
暮れだ師走だ　強い者勝ち
無血入城　孫の一団
四温にひらく　梅や水仙

愛媛県　渡辺暁童

中島生々庵選

くじよけた番号で来る年賀状
御出世にあやかる親戚の端の端
祝い客結納ばかりほめて去に
着ぶくれへ自動扉大儀そうに開き
誘致企業公害残して倒産し

松江市　中川晃男

やむをえず小走りになる晴れ衣裳
　北川春巣氏より句集を贈られて
詩の心その名もしかと「聴診器」
えべっさん賽銭受けにちと呆れ
兎にも脱兎の勇がありはあり
神前を下りて人間愚にかえり

名古屋市　吉田水車

酒恋し湯豆腐恋し　妻恋し
去年みな　さらり脱ぎ捨て初春に座す
門灯よ　おまえと妻を待ちあぐね
独り言ひとり暮らしに馴れてくる

島根県　堀江正朗

打てば鳴る妻いぬ部屋の闇深し

今治市　原田一風

貧しさのせめての奢り昼の風呂
花屑を捨てて今年の掃き納め
銭湯の秤(はかり)子が乗り親が乗り
自衛策先ずデパートに近寄らず
家建ててからの節約味気ない

島根県　錦織文子

独りの灯守り北風にたち向う
未だ燃える姿でれんたん白うなり
薄化粧女独りをあたためる
平凡を守りあしたの虹を追う
母性あわれ押える理性を見失い

神戸市　小浜牧人

年輪のさすが一と言釘を打ち
平凡な日の倖せに花を買う
マンネリズム破る接木の芽を育て
冬の街の渇きを癒やす花時計

三井酔夢さんへ

千の寿の鶴に化身の舞扇

大阪市　本多柳志

日記書き了えたしじまへ除夜の鐘
寝正月臨時ニュースに起される
年賀状墨の匂いもお家流
バス発車働く肩を詰めこまれ

考古学誤算千年出土品

大阪市　吉田圭井堂

未練まだ奈落の株を追い廻し
これが君　君のいびきだとテープ
中風で寝ても趣味のように妬き
金鎚で叩いた筈が引っかかり
はずかしくないかと揺れるイヤリング

大阪市　太田良子

成程とうなずく隙をつけ込まれ
痩せたのか入歯が又々動きだし
子に聞いているのに親がよくしゃべり
下戸同士はずむ話が気にかかり
肩書きを書かぬ名刺も刷っておき

大阪市　正本水客

きれいごと並べて既に負けている
ビラ配る人の視線をはね返えす
ためろうて心がおもい牡丹雪
港は素朴に徹して本当の海がある
甲ら焼きカニの香りが喉へくる

大阪市　西出一栄

六回目のうさぎ迎えた初日の出
老婆心孫の世代が気にかかり
回覧の訃報に背すじ冷えてくる
引いてあく扉を押して留守かいな
病む度に遺言少しずつ変る

鳥取市　河村日満

ただで使う役が新春から追いまわし
酔うてなお仕事の虫をもてあまし
雰囲気にはじめて聞かす唄も出る
はやばやと逃げとく金の要る話
しあわせはこころに神が住む生活

高槻市　福田丁路

明治から続く命へ活を入れ
雑草と闘う汗を手で拭い
惜しまれて辞めるが花と決意する
さっそうと余生を送るベレー帽
時既に遅く冗談とも云えず

大阪市　山川阿茶

なかなかにさらり阿呆になりきれず
長髪の車掌は帽子をやっとのせ
老の坂ブーツをはいて一里塚
占い師自分の病気が出てあわて
死ぬ事を思えば何もよう買わず

倉敷市　水粉千翁

てのひらに受けて小降りの別れ道
血色をほめて泣かねばならぬ嘘
記念樹は有為転変の枝を張り
泣き寝入りさせて泣いてる子守唄
もつれ糸ほぐす両手がもめている

宝塚市　傍島静馬

長生きはしたし安楽死はしたし
体中こすり寒さに挑む老い
飲み仲間誘いに来そうな雪景色
入れ知恵がなまじ決断にぶらせる
プロポーズチャンスと思う口渇く

岡山県　竹内翁童

合かぎの山がくずれてかみあわず
損を承知で男の意地がふるいたち
美しいままで散るよと花椿
ストなどに負けまい意地が歩き出す
赤字だろうなあ親切なバスに乗り

米子市　林瑞枝

濁さない心茶筅の指が冴え
享楽に遠く寸暇をひとり編む
損得に生きて砂上の城ゆらぐ
舞い降りる古巣は愛の灯を消さず
自信ない一歩もいつしかたどりつく

竹原市　小島蘭幸

ある決意とっくに野心捨てている
それでもしあわせでしたと女
仮面付けると　多弁
打てば響くものあり見つめ合うている
太陽は昇る負けてはならぬなり

桜井市　岩本雀踊子

喧嘩の種モウ切れましたと笑う妻

負け犬に雨の鋪道に音がない
ちっぽけな愛に飢てる目に出会い
良妻のたずなへ猿になり犬になり
父の職つぐ鉢巻を笑うまい

松江市　小林孤呂二

小さくともボーナスという金脈を持ち
母さんのお風呂はゆっくりしておれず
茶のみ話も暮らしにくさのことに尽き
一服は妻へ余生の抹茶楽しまん
乗客も駅長も苛いらする吹雪

竹原市　森井菁居

耶馬渓から宝泉寺温泉への旅

来て見れば洞門あっけないところ
温泉が出ねば不便な雪の里
旅の詩湯気の中から陽が昇る
湯の里にそぐう藁ぶき屋根の雪
人生感ちょっぴり変えて阿蘇けむる

守口市　羽原静歩

吹けば飛ぶいのちの今日を長らえる
彼岸会の雲に父が澄む母が澄む
積み上げて積木崩れる日の哀れ
シャッターが待ってる孫の初笑い

幼稚園

お隣はピカソこちらはマチスなり

倉吉市　奥谷弘朗

金策となると御曹子が光り
帰省して和服の柄も母好のみ
正月の顔を乗せてる娘の晴着
従いてくるだけの女房でこと足りる
松葉蟹せせる手付きも通のもの

堺市　高橋千万子

セット少しくずして私の顔にする
失言の消しゴムだった酒の宴
本心がアクビになってはっとする
日をおいて怒った事がよろこばれ
灯を消すといきなり冷える冬の闇

笠岡市　松本忠三

姑から嫁へ杵どり引き継がれ
事始の受付嬢の一張羅
名刺うけ置いて社長の寝正月
孫がバイバイして正月が終り
事故ゼロの祈願も空し地蔵尊

神戸市　仲どんたく

嫁一人加えて今年の屠蘇の膳
才女今日女となりて初晴れ着

有田にて

幾代の窯の火護り轆轤舞う
勝ったシャツ負けたシャツ脱ぐシャワー室
古き良き日本を見たりお歌会

鳥取県　清水一保

主義主張離れて参道埋め尽くし
柳友の句碑に神話が去来する
病院も職場働く笑い声
天命にまだ執念が燃えて生き
共白髪同じ運命を笑い合い

大阪市　本間満津子

いとしさに強く抱けば孫はおびえて
耐えること慣わしなれば笑顔して
餅二つ焼いてひとりのお正月
触れて知る習いを悲しく誤解され
繰り言を聞かされ私を省りみる

八尾市　高橋夕花

華やかに炎えて哀しい寒椿
自己嫌悪ああ水仙の清らかさ
藤いろの傘ほしくなり京のまち
悔むまい明日のページは真っ白だ
天の秘密もれてきそうな小ぬか雨

島根県　堀江芳子

窓灯りみな元旦のあたたかさ
病棟にとりのこされて除夜を聞く
春そこに雪も親しいもののうち
尖りそうな心を冬陽抱いてくれ
ひさびさのような握手で夫に逢う

堺市　河股緑水

ライバルに仕事始めを励まされ
チンドン屋夫婦に戻る帰りみち
日曜の朝の雀の親しさよ
男手と知ってオマケを一つ呉れ

藤井寺市　西いわを

霧吹いてピンと整う障子張り
ふたありの秘密二人が持って逝こ
箸の先舐めても一本追加させ
木肌にも節くれだった固い皺
狂人になる外はなし空を見る

兵庫県　小西無鬼

バトンタッチ後は顧問と祭り上げ
引退の潮時と云う感謝状
一ト粒の火種へ祖母の火吹竹
除夜を聞き今日元旦の花を活け
三カ日やっぱり飲んで医に背き

西宮市　若林草右

湯豆腐の眼鏡の翳にあるぬくみ

竹荘氏篤し

生体反応頷ずくだけとは寂し
敬老会司会も咳に悩まされ
おみやげの砂はズボンの折返し
安来節鰌もエッサッサと逃げ

岡山県　岡村久志良

古本屋古道具屋日日是好日

蓮月に惚れ良寛に惚れ老いにけり
お客さん向きとは面白く安いもの
「休雪」の茶碗枕許に置いて寝る
「新兵衛」のかくし印だと判った日

岸和田市　高橋操子

父ちゃんと上げて正月らしいたこ
月で餅ついたうさぎの世が恋し
着飾って金魚は物価高知らず
平和な世で食べる雑すい酒が要り
美しい音色流して清掃車

倉敷市　本田恵二朗

わが城の銃眼塗りつぶして平和
派手なプレザーを着て余生を楽しむか
方向音痴地図の通りに来て迷い
迷ったこと土産話に伏せておく
来春を花で飾る気寒の肥

竹原市　山内静水

四季の花　花びんに流派などいらず
旅の恥かき捨てやっと乗れた汽車
二重底ますます深くする世相
消費者は怒るマジックで消したあと
ぷつんと歯にはさまってた胡麻の味

岡山県　浜野奇童

そこまでを読んでる老母に逆らわず
打ち消した妻の瞳を信じよう
少し無理だったかいなと筋を揉む
パパママで育ち童話へ遠く住む
許す気になった歩巾を取り戻し

岡山県　池田古心

無聊の日煙草は口中傷めける
わずらわしき世よ愚鈍になりたき日
筆持てば己れ逆う線となり
くったくを隠す笑顔に陰走る
余生と云う線は他人が決めてくれ

東大阪市　竹中肖二

三面鏡これが自分の横顔か
大げさな描写でうける写楽の絵
肩書きの名刺黙って父に置く
税務署の思いがけない柔らかさ
酷使したブラウン管が暗くなる

松江市　恒松町紅

反論へ課長の齢が軽く受け
落着きが出来てそろそろ停年期
揶揄されているとはしらぬアンコール
月賦まだ済まぬ車でハネムーン
新婚に便乗をして大社さん

松江市　柳楽鶴丸

平和なら地球が四角でも多角でも
いつわって咲く元旦の白い菊
長生きをしような喧嘩が出来ぬから

鬼の面つけて不況を生きようか
真面目な僕の写真に馬鹿野郎

呉市　槇田英詩

のし袋は赤だ財布のおおらかさ
子の咳を気にする母の咳止まず
時間がないから鏡に納得させる顔
電話ベル近くにいるから立たされる
作業衣が白く要領よい男

大阪市　中川滋雀

元旦の計へ迷わぬ墨のあと
話だけ聞けばこの世は金ばかり
その先を言えば崩れる虹かとも
妻なりにおせちへ年季がしみた味
餅のカビ落としにかかる初仕事

大阪市　児島与呂志

借景と云われてもよし山の肌
妻と娘に背信背負うたまま生きる
妻と娘の中のひとりが僕でした
気に入らぬ事を気にせぬ若さです
ただ単に俺だ俺だと生きている

岡山県　出原敬一

段畑捨てるに惜しい島の四季
出稼ぎの部落が生きる無人駅
幾つものドラマ書けそう喜寿の皺
もの総べて子のために残す老の汗
雪なめて祖母を寒がらせて遊び

松江市　吉岡遙児

ままならず貧と不幸が揃って来
追伸にくどくどしくも親ごころ
やっとこさ覚えた歌がはや下火
代読の祝辞もしかつめらしく聞く
コンマ以下でもそれなりに夢を追い

大阪市　金井文秋

縁のない相続税が安くなり
耐えるのに限界迫る小企業
タコ配をどうにか続け生き延びる
兄の死によほどこたえた猪口を伏せ
五十ではまだ死ねないと酒を断ち

大阪市　小出智子

幸せの続くこわさを口にせず
幸せの城で眠っているような
元日の雀に米を撒いてやる
わが子と云うはしみじみとあたたかし
子に通う心の彩を撰っている

大阪市　河野君子

初風呂で女の匂いは流すまい
殊更に飾れど哀しつくも髪
寒椿女の決意のおろかしさ
少し妬けて友へ何やらいい予感
暖炉囲む夫と齢の重さなど

島根県　小砂白汀

吐血ダウン（二句）

噴き上げる血潮が残ってたとはうれし
相愛図ふうふ仲よく二〇〇圧

倉敷市　稲田豊作

羅針儀をいっそはずして捨てようか
ふん張れば砂にめりこむばかりなり
燃えることより知らぬ太陽のバカ

富田林市　板尾岳人

妻子背負うて獅子奮迅が花の頃
虚勢張る盃大目に見ていよう
じぐざぐに無駄を歩いて齢古りぬ
精神一到　却てポカをやるも齢
わが菩提頼もう尼は器量良し

大阪市　大坂形水

登っても登っても罪許されぬ
斜めから降る雪　山の峰飾らざる
雪を踏む音で心が白くなる

有信新之助氏金剛登山十回

又ひとり金剛山に魅せられる
登らねば小さな罪にもけつまずく

長男手術

万一のことが浮んで居たたまらず
母親としてただ出来ること百度石
電話ベルにドキッと妻の眼も怖え
祈る気でガスの出るのを待つ看護
まこと　天使に見える看護婦さん

西宮市　藤村〆女

ひとつひとつ芽吹いて私の夢が咲き
寄せ書の顔が笑って話しかけ
偶然に逢ってどっちも孫を連れ
未だ蕾梅の便りを書き添える

和歌山市　津田与史

年末の入院抱負にはない錯誤
リンゲルの点滴反省の雫とも
病院の元旦小さい餅ですみ
寝る時間あり過ぎ病院眠られず

京都市　都倉求芽

本心も素顔と共に塗り込める
鼻唄が途切れ途切れの妻楊枝
正月は下戸も一升瓶買っておき
冬の陽へみな目を閉じた石仏

大阪市　竹内一世

親同士協定してるお年玉
初詣で今年も同じ願をかけ
嬉しい日化粧の伸びの正直さ
音たてて希望湧いてくるも春

和歌山市　小川佐知子

母の手へ渡す小遣い嘘もまぜ
石仏も人出の波に目をさます

耐えている背へ仲間の手のぬくみ
放たれる庭ないままに籠の虫

高槻市　山田季賛

酔えるだけ飲んでも見たい病み上り
コーヒ無し朝食パンの回復期
永い目で見てちょうだいと妻へわび
血圧が今日も気になる風呂上り

新宮市　大矢十郎

一票を乞う放言も古狸
牢名主顔で始発のバスに座す
ひと雨を降らす科学へ待ちもうけ
褒められてけなされてにやにや私です

伊丹市　小川静観堂

銭入れを逆さに振って倖せの初詣で
夢の父へいつも見習医官が酒を注ぐ
お茶のみに往けばあちらでも待っていて
刑務所まで泣きに来て呉れたジャワのバブー

西宮市　島居百酒

明日のない暦で今年の悔も閉じ
不況風ジングルベルもまばらなり
小包の括りかたから母と知れ
奇形児にする盆栽へ老眼鏡

岡山市　川端柳子

愛情という曲者よ腹も立て
公私共大変なんです糸もつれ
心解きほぐすに足りぬ片えくぼ
地味に着て心の晴着は用意され

東大阪市　落合思月

信じあい庇いあって共に老い
へそくりと云う手もあり女動じない
野仏を片手で拝む野良帰え
妻の敷くレールを無言で走るのみ

東京都　増田次章

寒空にお義理のデモはふところ手
知らなくてよい情報が多すぎる
叱ってるうちにだんだん腹が立ち
過ぎ去ればたいしたことでないマル秘

和歌山市　沢山福水

六割は輸入と言うに休耕田
信念は曲げず余生の詩に生きる
静と動すれ合うたびに火花散り
それぞれに石は歴史を語り継ぎ

松山市　谷のぶお

みかんだけ箱一ぱいのお正月
集金へ日向ぼっこのしたい塀
広告に金貸すとこの多いこと
痛い足痛くない日のありがたし

奈良市　宮口笛生

だまされた冬の苺の味もよし
起きていても寒いだけやと父の冬

冬嫌う父暖ためる母が亡し
ごぶさたが長くなりけり母が亡し
松原市　玉置重人

初詣でみんな日本の娘に見える
大みそか孫のお守を予約され
ひとコマがすねて歯車かみ合わず
木枯らしに赤いホッペにもうなれぬ
和歌山市　垂井千寿子

哀しさも女は食べてまぎらわし
嫁が来て秋茄子話題にして和み
叱る事溜めて帰省の子が待たれ
留守番が一番先に風邪を引き
島根県　景山綾美

腹の虫なだめて聞こえぬふりをする
十二月三十一日徹夜勤
暇眠から覚めれば昭和五十年
除夜の音を通過列車が消して行き
引継を終えて元旦の陽が高く
鳥取市　両川洋々

人間不信心のトビラ錆びつかせ
コンピューターに俺も数字で打ち込まれ
男一匹女房ひとりを持て余し
しらじらと砂丘白夜の如く暮れ
岸和田市　植山武助

日曜の食事二時間ずつずらし
雰囲気が好きで訪ねて又よばれ
噛み殺し損ねた欠伸へ暇する
銀婚へ妻の思惑ずれたまま
大阪市　宮尾あいき

初風呂の肌はまだまだ湯をはじく
こんな時が私にも来た文机
朱のすずり箱戴いて
燃えて候と書き候えとすずり箱
末っ子二十一回誕生日
後幾年母と暮してくれるやら
出雲市　尼緑之助

何んぼかの誓い絵の具の色を撰る
早暁を働き者のうた寒雀
水鳥の天国宍道湖は陽と雪と
大橋の霙に宍道湖からの風
豊中市　戸田古方

じっとしてろと不動さんおっしゃるが
怖い絵もならぶ児童画展覧会
蓮っ葉に隠語に隠語ハイティーン
編み棒をおいて朝市客迎う
高槻市　若柳潮花

没句でも自分の胸にある歴史
千両の紅がより添う春の床
完全看護娘を置いて去ぬ病棟
見舞の娘匂いのきつい花と来る

お帰りと云う声もなく鍵の音
一人ずつ辻を曲った月の道
捨て舟の影がきれいな冬の月
元旦の寮帰郷せぬ娘の晴着

尼崎市　黒川紫香

銭に不自由ないと手相見うそを言い
とまりたいとまりたくない里帰り
いざ鎌倉まで水の流れにそうている
一と握りまいて鳩にもおめでとう

大阪市　天正千楢

私から笑い初めて新春に満つ
年玉へ廻らぬ舌で「嘘」唱う
ひたむきになれる事あり矢をつがえ
雪しんしん無言の夫婦に重い屋根

富田林市　岩田美代

百二才の祖母の笑いの神々し
眉間の傷はやくざの紋章
旅疲れの上にいろいろ恋疲れ
君知るやあいつは恋の密猟者

岡山県　直原七面山

ふと日記見つめても一度反省す
頂上が見えたと元気取り戻し
きき耳を立てて兎は飾られる
休まうとすれば麻雀呼びに来る

唐津市　新岡回天子

酔うた振り貴男の手口が見たかった
信じてた子の歯車が狂うてた
底辺に生きて頂点への挑戦
大海に針を探すに似た希望

倉敷市　藤井春日

それぞれの星を背負って乳児室
夢と道連れ就職列車の笛
二十才の周辺恋と革命と
ワンタッチ暮らしに過程見失ない

氷見市　関美子

保証人の責を問われているサイン
人権が僕にもあった日向ぼこ
せち辛い今日を生き抜く百面相
振り向いて自分の位置を確かめる

倉敷市　小幡里風

去る者は追わずと言って淋しそう
プレゼントしたネクタイを締めて来ず
ゆっくりと歩むはっきり遅刻する
折伏のはなはだ困る善意ゆえ

東京都　山根白星

感謝状表彰引退へのお膳立て
尼さんを女の足に戻す雪
満員と見て落着いた指定席
美しい賀状にお名前抜けていて

兵庫県　遠山可住

和歌山市　野村太茂津

ためらわず早春の野へ体ごと
ぬるま湯で苦しむときもある自虐
心から笑う個性を丸出しで
斬る技で斬れば竹光鬼気せまり

倉敷市　野田素身郎

仕事始め僕だけ去年の背広なり
週刊誌も読まずぼんやり三カ日
習性がよその電話に手を伸ばす
花もない机で青春すり減らし

出雲市　原　独仙

暇つぶすそんな輩(やから)の初詣
七草がゆ明治の味へ差し向い
長生きをするに年金足りませぬ
宮鳩の食い過ぎもいる三カ日

美祢市　安平次弘道

経済欄見るのが恐い株下る
廃鉱を自然にかえすすすき原
宝くじ金に縁なき長い列
冠婚葬祭皆狂わせてスト終る

大阪市　神谷凡九郎

ライターは誰　俺を主役の日々が過ぎ
あなたが主役アドリブもまかされる
悲劇喜劇どうせ私の茶番劇
悠久へ百年満たぬ抵抗か

兵庫県　大江秋月

お隣りが美人でパチンコ入らない
年金を尻目に非情な物価高
風邪をひくゆとりも無くて決算期
特急も二級も同じ酔いごこち

大阪市　阪上十止庵

金の力知っているからケチになり
妻として今日も暗譜のタクト振る

昭和五十年一月十一日午前十一時五十一分（二句）

呱々の声若いつもりを祖父にする
あらためてお芽出とう聞く残り福

大阪市　河井庸佑

かきわけて栄進した顔写される
春近く浪人の頃思い出し
異動期に身辺あれこれあわただし
理由どうあろうと負けた者は負け

大阪市　今西章雅

徹夜のままの商人混る初詣
気のせいか瞳うつろな未亡人
玉子割る器用な片手左きき
考えまいとして考えている余生

尼崎市　高津徹也

新聞少年の息こそ少年の香を放つ
ハンカチに貝をつつんだ夢を覚め
時ありて時を精算出来そうに

枝少き枯木に春が待っている

大阪市　西川誓二

狭くとも波風立たず桃源境
平かなの孫のはがきが喜ばせ
老母様にせめて三度の温い飯
引取った老母は明日の我が姿

神戸市　中村ゆきを

転職の先潰れたと舞戻り
処生術の如く遮断機くぐり抜け
耳よりな話へ鞄もちなおし
木枯しに浪人瞑想する夜更け

泉大津市　村上春巳

電話口御得居さんの風邪を聞き
ナツメロの中村君も歳をとり
木枯へ週休二日持てあまし
丁寧に頭を下げる冬の鹿

鳥取県　森田布堂

歩くのは恥とヤングは新車買う
新しい枕で首の筋痛め
叱られた子も泣き母も泣いている
牛乳を配る子牛乳など飲まず

今治市　越智一水

無に遊ぶ日へ倖せをかみしめる
新聞も読めぬ疲れへ妻の声
その傷が疲れた時にまた痛み

梅一輪咲いたと妻の声若い

大阪市　川口弘生

成人の娘へ寒菊の遅ましさ
直言のチャンスは酒に左右され
おみくじも口実にして断わられ
人間として先輩にふれた酒

八尾市　大路美幸

激怒する俺の横顔見たくなる
花かげに軍靴置いてる平和論
風の音聞く倖せな夫婦です
もう花の序曲を見たり雪の下

八尾市　宮西弥生

阿呆になる顔もあります逆光線
働ける足で階段を上る
酔った眼で見れば倖せな手相
汚染した大人童話へ逃げてくる

京都市　松川杜的

泉涌寺七福神巡り（二句）

七福神巡り笹の俵をもて余し
楊貴妃観音笹のあいから拝んどき
はるの酒うれしく賀状につぎこぼし
松の内捨てるに惜しい祝い箸

宇部市　平田実男

進学の娘一人へおそい初春
人生の起伏をプラスにする若さ

迷わなくなるためとことんまで迷い
あやまれば妻も素直な目でこたえ

島根県　榊原秀子

恩師金婚

金婚の虹の高さへつづくみち
何がどうあらうと迎えた初あかり
佳句ばかり貰うはげみの年賀状
振袖が雪に泣いてる山の街

大阪市　柳原静香

初詣母の願いは無限なり
葬式が延びたと新年会へ来る
久方に母娘で流す旅の宿
凧一つ赤穂の海を初春にする

竹原市　時広一路

脇役として雲残照を変化させ
後戻りするには道が消えていた
時ならぬ突風愛の河荒れる
愛する日憎む日空は澄んでいる

三重県　川上大輪

知事賞の余韻も嬉し屠蘇の味
朝の風呂余裕を少うし取り戻す

北方領土

返還を叫ぶこだまが返らない
古老の死墓標は島に向けて建つ

橿原市　岩井本蔭棒

冷戦が峠を越した温いめし
二三輪晴着も咲いて過疎の初春
スタートはトップでゴールインはビリ
正月へ犬もなにやら勘狂い

岡山県　永宗宗義

十二月八日に想う一句

朝がけも効かず一気に押し切られ
七草が一つ足りない辞書を繰る
閑村の自慢は大根が見栄を切る
許す気の叱言がゆっくり腰をあげ

堺市　藤井一二三

鏡掛け替えておんなを失わず
亡父の歳越した不安とよろこびと
右向けミギ妻も子供もヒダリ向き
またヒトの好さ悔んでる勇み足

東大阪市　竹中綾女

造り物の兎それぞれ個性持ち
寒行の太鼓救急車の音を消す
無理解な親と言われたくない黙秘
サボテンに冬支度さす霜予報

岡山県　横山一声

火葬場も仕事始めか煙が出
金策に行くにもゴルフ用具持ち
親が先ずたのしんで居る子のおもちゃ
寝て待って居ても福の神は来ず

真夜中のビルは孤独と闘えり
紙袋夢一杯の里帰えり
神仏もシワ寄せされる物価高
一年の抱負頑張り通すだけ

大阪市　津守柳信

それぞれの横顔を持つぼたん雪
雪達磨わが影みつめつつ崩れ
故郷の土抱きしめ鉢の芽天を指し

竹原市　三宅不朽

ペン蛸も五人を支え頼る指
栄転を約束されて左遷され
参観日張り切った答え違ってた

姫路市　梅谿庵不酔

孫達も引揚げこれから寝正月
ひたむきな愛情をちと持て余し
通勤へ関所手形が三つ要り

守口市　村田瓢太

労働の三日休めば身がなまり
素手で来た客が一番さわいどり
何もかも母ならではの父であり

笠岡市　出原真奇

素手で来て鱈腹飲んでくれる仲
喜寿となり子にも孫にもうまが合い
胸張って居るからずっと若う見え

笠岡市　木山遠二

あとでまたなどと友情遠くなり
美辞麗句貯え隙のない男
都市砂漠義理人情を置き忘れ

大阪市　江城修史

母独りのこすしこりへ娘の涙
孫つれた婦長に逢うた市場籠
薮売れたらしい噂へブルの音

大和郡山市　森田カズエ

幸せの何日まで続く日記帳
腹の底から詫びて自分の馬鹿を知る
転んだら起る古巣で親が待つ

玉野市　小谷仙山

物価高雨よふれふれ寝正月
自慢して笑われてみたい子がほしい
滝壺の注連も凍る行に生き

宿毛市　山本窓花

ここだけの話を友も聞いて居り
心ではとっくに詫びて居る私
大川の流れへ腹立ちぶちまける

貝塚市　行天千代

迎春を祈り霊園墓洗う
野心家を成長株と見た不覚
債務者の方が鬼の面かぶり

和歌山市　吉野冨江

和歌山市　内芝としよ

貼り方を教える母もまだ未熟
追羽根へ恋の心も添えてつき
嫁ぐ娘へ父は淋しく音痴節

八尾市　古川鶴声

十二月二十七日弟の死
母よりも弟に逝かれ孤老めく
狂乱の浮世を遠く亡母のもと
永らえて今年もあえぐ物価高

大阪市　河村瑞川

八十三才
八十三不満ばかりの年が明け
兎さん今年はゆっくりとんでくれ
行く年を引っ張って見たい気も起り

富田林市　和田維久子

お膳からお膳にわたる孫の箸
かなう夢かなわぬ夢も盛る初春
受け売りを伝えて心痛む羽目

平田市　久家代仕男

阿呆くさいはなし無視する煙草の輪
築地松わが家の歴史お見とおし
年輪に家風を刻む築地松

松江市　岡崎祥月

それぞれの個性に生きる宝船
老いてても女は化けるわざを持ち
三が日までは和服にある魅力

ガレージに漬物桶が雑居する
温室の花ばっかりの冬がくる
全通スト滞貨落ち葉のように積み

小松市　馬場魚山

値が上るまでは埃でいた花瓶
マスコミをどうかと思う御世の春
童べ歌母のない子が下を向く

下関市　国弘半休門

新刊は編集後記だけを読み
呉越同舟見事に筆の使いわけ
一句組に万年甘え出しつづけ

東大阪市　森下愛論

億で呼ぶ予算の陰で袋貼る
節約がそうさせているミニ強し
倖はコロコロコロと笑う嫁

兵庫県　河原みのる

思い出の吟行亡き師眼に浮ぶ
夢醒めた兎急がす新春明ける
世渡りの無理にぽつぽつ出る裏目

東大阪市　桑原喜風

いくつかの背が躍る雪のブルース
妥協して何か足りない世に並ぶ
空想を抱いて砂漠の亀となる

柏原市　大峠可動

寝正月だけど気になる空模様

伏見初詣

心経へお山のお滝も和して誦す
不況まだ序の口という小雪舞う

岸和田市　葛城伊三郎

しぶちんの屋根へ雀も寄りつかず
老いだけが守る屋敷の跳ね釣瓶
背を向けてだるま片眼のままで泣き

羽曳野市　塩満敏

暮れの駅軍歌と民謡肩をくみ
ビデオどりすませて芸人屠蘇を飲み
おすましを一皮むけば狂う恋

倉敷市　能登原白水

寒かろう盆栽の水温める
吹き込んでテープ愚妻の鼻動く
来てたのし帰ってホットさせる孫

諫早市　原田明春

アンケート良いことばかり書いてあり
二期三期とぼける顔はいたにつき
珍客へすばやい妻のかくし味

米子市　増田竹馬

其の功を語らず乳房うなだれる
芸の巾主役と見せぬよごれ役
任期二年三等重役落ちつけず

堺市　伏見茂美

そんな事有ったかなと酌いでくれ
娘の顔に丸みがついて安堵する
胸一パイ澄んだ空気と入れかえる

大洲市　堀内暁風

失敗へもうこそ依頼心を悔い
お隣の分まで掃いて綺麗好き
人質として誘拐の子がなつき

岡山県　光好陽子

三カ日朝寝から昼寝早寝をし
まな板を追っかけるように子が育ち
日雇いに金脈縁のないはなし

東大阪市　斎藤三十四

六十路まだ兎跳びの夢があり
正月を御流儀しかと挨拶す
千円で家内安全初神楽

鳥取県　鈴木村諷子

小石になって聞きたや水のささやきを
売り牛の脚の速いも哀れなり
どなったり泣いたり零の暮しする

大阪市　室谷徹舟

定年が遊んで居れない物価高
食うのには困らないから職をより
退職の願いへ実印確と押す

大阪市　飛田好一

不況風何処吹く風の札も舞い

万が一うつろな願い宝くじ
独り占めそんな我欲を自嘲する
仙台市　川村映輝

才費値上げ野党うっかり手をあげる
赤旗を焼かねばならぬ羽目になり
添削が句意を違ったものにする
守口市　野呂右近

女房も六十一と積み重ね
堂々と嘘も交えて三選目
裏切らぬ自然を友にする余生
神戸市　佐々木静泉

とらがりも止むなし妻にしてもらう
大晦日飲んでテレビのおもりです
大晦日神棚飾っただけでした
大阪市　鈴木生仏

大寒があって桜の春も来る
墓参り子供残した妻にぐち
子はスキー親はコタツのお正月
和歌山市　田中万作

善悪を飲む盃のナルシシズム
釣自慢小鮒一匹ビクに寝る
極楽の父母と語ろう初詣で
和歌山市　若宮武雄

簡単に片付くつもりが悔いを積み
汚れずに生きる貧乏の痩我慢
ひたむきに生き驕り知らないゆとり
枚方市　稲葉星斗

豪雪に戻る出稼ぎ春遠し
チラシだけ春の装い送って来
口紅の色もほんのり春近し
加賀市　細呂木魯木

演出も混えて病人喜ばせ
初詣終えてそれから胃をいじめ
大阪市　神田秀峰

表彰に現金無いので子はぼやき
良い席を〆めて景色も観ず眠り
大阪市　不二田一三夫

飲まねば楷書飲むと草書になる女
寄席
林家染語楼師逝く（50・1・18・心臓発作・56歳）
異端児も心臓だけはただの人
若本多久志

無情とや賀状と共に聞く訃報
デパートに欲しいものなし老いという
反論も自由に吐けぬ舌悲し
福祉　福祉と恩に着せられる
旧友Kに
マイホーム二度目の妻と若く住み
鶴首で誕生日待つ気の弱り
北川春巣

今後ともよろしくなどと気の弱り
年金の暮し弱者の部にはいり
電車に乗って足馴らし疲れて来
泣き声も五カ月せがむように泣き

川村好郎

日々新たなり一月の暦はぐ
迷路を歩くワイシャツどう変える
スイッチを切るよう消せぬ恋の灯よ
飛び上る齢ではないが春近し
年甲斐もなくかたくなな日の多く

西尾栞

ライバルの帰るゼスチュアーだけはする
洗礼の名は別にあり姉細し
今日という今日女という名が哀し
天来の声があったと首尾話
感謝していますともと妻の口答え

菊沢小松園

埋み火のままに世間がしておかず
本当の顔は涙が消えてから
雑音の一つと小言聞き流し
見詰められることを覚悟の顔になり
血を吸った草は語らずけものみち

作

今治市　月原宵明

オーバー着たままで賽銭はずんどき
炎えつきた恋の彩り蔦かつら
鏡かけ女の涙吸うた色
買うて出た訳ではないが仲を割き

大洲市　米沢暁明

聴診器何ぜか気になる言葉尻
身に覚えある子の嘘へハッとする
よくしゃべる女へ雀負けた顔
不機嫌な妻も寝化粧忘れない

岐阜市　市川鱗魚

桐柾も明治気骨の抜けぬ父
一万円この頃子供恐がらず

近

我慢している貧しさをほめてやり

東京都　池口呑歩

養子先養父は漁師の赤ら顔
一応は坊ちゃんという養子先
三十人の部下へ養父にある威厳
養父はただ仕事一途の肩の幅
大漁旗養父を迎える浜の冷え

今治市　長野文庫

陽の恵みはっきり見せる南側
さんま焼く匂いが好きで出世せず
苦心した手編みを時価で割切られ
雰囲気へ水さすように無精髭
何見たか信号無視の犬走る

麻生路郎物語（3）

―川柳開眼は六厘坊―

東野大八

写真左は井上剣花坊・右が麻生路郎阿先生（大正13年10月5日・六甲・苦楽園にて）

「路郎は御存知の通り、素浪人肌の人間で特に師弟の関係を結んだ方はありません。ただ十四、五歳の頃から川柳、川柳と云うて暮らしていたことは事実であります。自からを〝天才六厘坊〟と称していた若き六厘坊から文学的な刺戟を受けていたようです」（馥乃書簡）

小島六厘坊との運命的な出会いは、大阪高商予科の金ボタンの制服をつけていた路郎十七歳（M37）のころである。柳号は天涯。大阪日報柳壇浪花樽の投句が機縁である。

この時点で、往時の川柳界はどのような環境なのか説明しておく必要がありそうだ。

まず本命格の古川柳畑の生成だが、初代柄井八右衛門が寛政二年（一七九〇）に七十三歳で他界したあと、二世無名庵川柳（初代の長子）が父の没後十三年目（文化元年）に二世を襲名した。折柄江戸は化政期の庶民デカタンス時代の世相を反映して、誹風柳樽も狂句色を帯びざるを得なかった。二世が立机十五年で他界すると、三世（初代の五男）柄井宗達が襲名したものの七年で隠退。後世柳界で悪名高き狂句川柳の本格的宗匠人見周助が登場し文政七年（一八一四）四世川柳を襲名、点者生活の暮し向きもあって柳多留も狂句オンリーで塗り潰した。八丁堀の町同心の出で十三年後隠退、柳翁と称し六十七で死去。

五世は佃島の魚屋出身の水谷金蔵。四世のバトンタッチを受け二十一年間、狂句一辺倒で初代川柳が世に残した川柳の詩たる価値を完全に喪失せしめた。安政五年（一八五八）没、享年七十二。六世は金蔵の長子謹。初号ごまめ。父の死後直ちに和風亭川柳水谷金蔵名を踏襲。明治十五年没、享年六十九。

七世は風也坊川柳広島久七が明治十六年社中推選で立机、三年後隠退して柳翁と改め、五年後六十七歳で死去。八世は任風舎川柳児玉環、初号柳袋、明治二十年一府三県の投票で八世襲名。このころから狂句界も宗匠公選制に切りかえたらしい。四年後七十二で没。

九世は万治楼義母子こと前島和橋、どうした魂胆かこの人物柳祖の無名庵川柳、緑亭または柄井川柳と潜称している。句柄は物堅くどうも神職くさい。明治二十六年全国社中投票で立机、同三十七年七十歳で歿。

十世は正面切って狂句堂川柳、平井省三。明治四十年十月立机したが、二年後社中の勧告を容れ隠退。しかし十一世が大正二年病気引退のため、十世名儀で再引墨。昭和三年八十歳で没。九世以降、この伝統川柳の正統派も、時のうつりかわりとともに台頭する新川柳派の勢力にかなり動揺のいろは隠せないようだ。（十二世以降は本稿と関係なく省略）

いずれにせよ〝狂句百年の負債〟のツケを貰う形になったのがこの十世狂句堂平井省三であったことになる。

剱花坊が百年のツケの筆下ろしは、初代柄井川柳が持つ〝柳多留〟の初心に還すことにあつた。もつとも川柳詩探求の柳多留研究といっても、明治三十年代はもはやこの江戸川柳の古典の風格は、狂句の海に埋没し去って柳多留といっても世間の人達にとっては皆目その正体が知れなかった。

しかし、柳多留の持味に関心を持つ、ほんの一部の有識者や好事家が小冊子の類でかなりの種類のものを出してはいるが、所せんこの試みは趣味的嗜好の域を出なかった。ところが明治三十三年三月梅本柳花が「川柳難句評訳」で専門的柳樽研究の正統的くさびを打ち込んだ。これに続いて二年後に鴛亭金升が数篇の評訳を手がけてのち、柳史上価値ある一石と認められた坂井久良伎の「川柳梗概」が世に出た。時に明治三十六年九月二十八日のことである。この中で久良伎は「文学の何んたるかを解し得る青年に、宝暦、明和、安永、天明の初代川柳の研究を求め、明治の新世代にふさわしい新川柳を作れ」と呼びかけたのである。

こうして明治三十八年、久良伎はそれまでの新聞柳壇にあきたらずこの年五月に「五月鯉」と「下毛江」の二つの柳誌を出し、剱花坊もまたこの年十一月「川柳」を刊行した。このなかで小島六厘坊もまた久良伎と機を同じくしてこの年五月に「新編柳樽」を出している。世にいう明治柳誌時代第一期の開幕である。

久良伎も剱花坊も初代川柳の直系が、年を経るにつれラチもない狂句一辺倒にもの狂いする姿を、まずは初代柄井川柳の手がけた古川柳の原点に還ることを力説したのである。だが、この両者の主張は同根異質であった。久良伎が川柳の三要素に立脚した江戸趣味を提唱するのに対し、剱花坊は文学に欠けている滑稽を新川柳のモチーフにすべきことを主張する。六厘坊は明らかに後者の剱花坊の側に立ち、文芸的川柳の確立をめざした形でこのことはやがて後に路郎に継承され、反久良伎、親剱花坊的傾向を帯びることになる。

六厘坊は明治三十八年五月「新編柳樽」を発刊し三号まで出したあと、翌年六月「葉柳」と改号している。この新柳誌は彼の後進者向けの小誌「柳道」を包括したもので、その第一号は第二巻とつけている。発行所名は大阪西柳樽寺社としている。剱花坊の柳樽寺社に対し「西」と付名した点が注目される。

路郎が六厘坊との出会いは大阪日報の浪花樽の常連投句者の立場にはじまり、六厘坊の「新編柳樽」に参加している。路郎の柳誌初登場がこの柳誌というわけである。年齢もともに十八歳前後、このことも両者のくさびを深くしていたようだ。

「新編柳樽当時は、単に柳樽の句を新感覚で凌ぐという単純な目標であったため、作句も気楽であったが、葉柳になり号を重ねるにつれ、六厘坊はその作風に新傾向を深めはじめ、悩みも進行していったが路郎も同じ苦しみを感じはじめるようになった」（山雨楼メモ）

「六厘坊は、天才六厘坊と自称するだけに言うことが実にてきぱきして主張は自我を貫いて一歩も退かず、相手がギャフンと云うまで論戦してへこたれなかった。実に徹底して剛腹な男でした。麻生君にもこの傾向はきわめて似通ったものがある」（木村半文銭談）

「先生と激論した事が一度あります。社中の或る同人の進退問題に就いてであります。一本気の僕は所信のありつたけを真向からぶちまけ痛論したのでありますが、雄弁をもつて鳴る先生には足許へも寄りつけませんでした。到々ぐうの音も出ぬまで言い込められ、脱帽させられてしまいました。ほんの一時間ばかりの心算が、遂に四、五時間もかかり僕は刀折れ、矢つきた形で、足を傷いた犬のようにすごすごと帰ったのであります。さる柳界の大先輩は、そのむかしの六厘坊の説法とそっくりで、六厘坊譲りだと申されておりました」（福田山雨楼S9・6川柳研究）

六厘坊が肺患によって死去したのは明治四十二年五月十六日で「天才六厘坊死ぬ・享年二十二」と自ら山雨楼メモに力をこめて記している。相当のショックであったことは言うまでもない。六厘坊が晩年の作風を掲げよう

—後添は足袋の嫌いな女なり
—いい役者でしたと話す絵草紙屋
—十日程噂を残す旅役者
—煙草を捨てて「したいことするさ」
—さる程に秋の扇となりにけり

―淋しさは交番一つ寺一つ
―病む我に此の頃母の物忘れ
―此の道やよしや黄泉に通うとも

世をおおう狂句増長慢の明治も末ごろに、このような詩情漂う作風をものした六厘坊はたしかに才能ある異色の川柳作家であったことは疑うべきもない。路郎自身も、彼の名につねに〝天才〟の名を冠した傾倒ぶりは、後年の路郎の作風へ大きく作用している点は、六厘坊の性格まで酷似している点とともに注目してよい。さらに路郎に限らず、一閃した花火のような六厘坊の束の間の才気に心酔してか往時〝銭〟に関する柳号が流行したと路郎がさるところに書いている。いわく七厘坊、八厘坊、半文銭、当百がそれである。

「漱石が子規と知り合いになったということは、芸術家漱石にとって、殆んど運命的なことだったと言ってよかった。漱石が子規と知り合いにならなかったら、漱石は或いは文学研究家として、一個の学究としてその一生を終始していたかも知れない。勿論漱石の芸術は、子規の刺戟がなくても、自分自身を爆発させる機会をいつか持つたにちがいない。然し漱石に文章を書かせ俳句を作らせ（中略）結局、漱石を小説家たらしめるに至った原動力が子規であったことを考えれば、芸術家漱石の一生において子規が勤めた役割は、重大なものだったといっていいかもしれない」（小宮豊隆「夏目漱石」）

路郎にあっては、六厘坊が子規の役割を果たしたといえば大げさだが、川柳への刺戟を与えた人物であったということは明らかだ。路郎が十七歳の高商予科のみぎり、上級への進学に文科を志望したものの果たせず、その想いが川柳への関心をたかめ、さらに積極的に意欲を昂進させる役割をおび、人間一人の生涯を「十七字に魅入られた人生にした」（北川巣春・路郎弔辞）その口火に、点火の役目をおびた人物、それは小島六厘坊であったということがいえばいえるのではないか。

六厘坊の死とともに、実父善七の死と重なったこの年の前年、路郎は大阪高商を卒業、徴兵検査も近視のため兵役を脱れ、いよいよ世間へ一本立ちの人間としての第一歩を踏み出している。明治年代も末期のこのころは、日露戦争直後の一大恐慌の嵐が吹き荒んでいた。造船所、軍工廠、鉱山などでは大規模な争議が瀕発し、農村では地主対小作人の農民階級斗争運動が過熱の度を加え、これら労農知識人一体の社会党の結成禁止を契機に、暴動、弾圧、流血の反覆はついに世に大逆事件と称される幸徳秋水事件となる。

このような世情を背景に短詩型の世界は、伝統に対する革新の火蓋が俳壇では河東碧梧桐、中塚一碧楼、萩原井泉水の自由律俳句が頂天に向っており、歌壇では与謝野晶子、石川啄木が社会派の新傾向で世の若人たちの心を魅了していた。明治新抒情詩時代の爛熟期である。

これに対する柳壇は、狂句に挑戦して勢いのよかった久良伎は「五月鯉」を、剱花坊は「川柳」を資金難と内部相剋から休刊中で、窪田而笑子と田能村朴念仁の読売派が分裂し「矢車」がその産物として出版され、「滑稽文学」と競い合っていた。この東京側に対し六厘坊とともに「葉柳」（十七冊で廃刊）を失った関西の柳人たちは、直ちにこの年―明治四十二年九月関西川柳社を設立した。当百、卯木、虹衣、百樹が発起人で蚊象、奇峯、五葉、水府、路郎、半文銭らもこれに加っている。俳壇・歌壇のけんらんたる実勢にくらべ、柳界はまるで磨きぬいたランプの光芒の中の線香の火のような存在ともいえた。しかし、この関西川柳社が五年後には「番傘」誕生の母胎ともなるのである。

「十月八日（M43）句会の帰り当百、卯木、虹衣、墨湖、千松（路郎）の五人と一六庵でそばを食う。千松の路郎と話したのはこれが初めてなり。千松君は「葉柳」廃刊後川柳を休んでいたらしいが例会は久振り」（水府記）

路郎・水府という後年のライバルの出会いが日付を名記してのこの記録は甚だ貴重というべきであろう。

この両者の初顔せの翌年四十四年七月、二人の合議から「轍」が発刊されている。青明の一、五葉の林之助、半文銭の三郎、緑天の由三、水府の竜郎、千松改め路郎、それに蚊象が加るといった顔ぶれだ。

「柳号を本名で短詩と正面から取組もうとしたのがミソ、然し二号で潰れた。」（水府記）

天涯から千松そして路郎―柳号を正式に路郎と定めたのは、実にこの「轍」からである。

鈴木黄

誹風柳多留廿五篇研究

西原亮・入江勇紀・内恒久
鈴木黄・清博美・青木迷朗
室山三柳・八木敬一・岡田甫

79 **雷りまでハ玄徳はしを持**

西原—三国志に故事がある。『三国志通俗演義』（岩波文庫）に、「〈天下の英雄を論じて〉曹操は、まず玄徳を指さし、それから自分を指さして『ただ今の天下に、そなたとわたしだけじゃ』。玄徳は、はっとおどろき、手にしたはしを思わずおとした。そのとき、かみなりがなりひびくとともに、大雨がにわかに降りそそいだ。玄徳ははしをひろいあげながら、『かみなりのおそろしさに、つい不覚をいたしました』。曹操は笑って、『大丈夫たるもの、かみなりがこわいか』といい、玄徳は役にたたぬ人物だと思った。さすがに悪ぢえのある曹操も、この場をごまかした玄徳に、まんまとあざむかれたのであった。」句は、以上のことをいったもので、玄徳の深謀がテーマである。

室山—賛。

ごろごろと言うと玄徳箸をなげ　三九・33

玄徳が箸に曹操くらひ込ミ　五四・7

岡田—同。

80 **扇屋の要東江流を書キ**

西原—扇屋は新吉原・江戸町一丁目にあった妓楼で、五明楼とも称した。ここに名妓「花扇」がいて全盛を誇っていた。「扇屋の要」とは花扇のことで、扇の縁語仕立である。

彼女が書道の東江流をよくしたというのが周知の事であったらしい。

入江—賛。

江戸町に身は末広の花扇　一二九・3

岡田—賛。

81 **花の雨寝すにぬったをくやしがり**

西原—花見に着るべく、懸命に晴着を縫ったのに、雨は無情だった。

空色を見合せてぬぐ花の雨　二八・18

本降りになり御不断に御召シかへ　二五・15

室山—わたしは化粧と解し、白粉を塗ったと思っていたが、礎解の方がはるかに適切。

入江—私は塗ったと解して、室山氏前説の化粧にもどる。

首ばかりよそ行で居る俄雨　二七・19

真白ナ顔のあぶれる花の雨　八〇・2

清―「ぬった」は、縫ったではなく、塗ったご化粧だと思う。

紀内―入江氏引用句からも化粧説に賛。

青木―化粧説賛。「寝ず」は前日からの支度と、期待で睡眠の浅かった事をいう。

岡田―夜通しだから「縫った」説も成り立つ。「夜通し塗った」はいささか不穏。

82　**大風を吹かせに娘やとへ来る**

西原―「娘宿」は最近まで農村にあった風俗である。若衆宿に集まった青年達が、夜娘宿をおそうのである。「キャ！」といわせる。娘のさわぐのを「大風を吹かせ」と表現したのである。その性的無軌道ぶりは筆紙につくしがたい。

室山―礎稿、最後の一行にややうらやましげな響きあり、とみたはひが目か。呵々。賛。わたしは「娘、宿へ来る」と読んだので、宿下りの娘がみがかれて美しくなっているので、旋風を巻き起したと考えていたのだが。

入江―室山氏説に賛。

　藪入が来て大風を吹かせてく　安六・五・五

清―小生は娘宿説に賛。藪入りで娘が宿に来るとはおかしい。家に来るという表現でなければならない。

八木―室山氏と同じように読んでいましたが、礎稿および清氏にそう云われると、そうかも知れない。清氏のおっしゃるように、娘が宿へ来るのはおかしいが、「宿下り」とすれば、家に来ることを「宿へ来る」といってもおかしくないのではないでしょうか。

　壱丁の血をうごかした宿下り　拾二・7

一応「宿下り」の句としておきます。

紀内―同。「宿下り」説賛。入江氏例句適切。

岡田―「宿」の語は、入口業を指す場合もあり、自家を指す場合もある。これはよく知っておいて頂きたい。従ってこの句の場合は後者、すなわち自家です。お手がついてお妾にでもなったのでしょう。大した威勢で宿下りした娘の句。

83　**さくらより娘あぶないとしによみ**

西原―この娘は「秋色女」のことである。『江戸名所図会』に次の記述がある。

清水観音堂・秋色桜

秋色桜は清水堂の御供所構のうち井のかたはらにあり。花は一種にして虎尾と称するもの是なり。中頃江府の商戸何某の女秋色といへるもの花のころここに来り、井戸はたの桜あふなし酒の酔

といへる秀句ありしよりかく名つくるとなん。

『江戸砂子』は、もっとはっきりしている。すなわち「小網町菓子屋のむすめお秋といふ者、十三才の時花見に来りて」とある。

桜は「花も十八」といわれる。それよりも若い十三才で、よくぞ句を詠んだものであるとの意。「桜あふなし」を援用し、「十三ばっかり」が裏面にある。

　十三の春十七の名を残し　二九・4

室山―賛。秋色女は其角の弟子であった。

入江―同。

　いつ迄も桜ざめせぬ名句なり　三六・21
　五七五で桜に残す秋の色　一四四・17

八木―同。「十三ばっかり」を効かしてる。

　井戸はたの桜でお秋名が高し　二四・36

青木―「あぶない年」……「十三ばっかり」の意識が底にあるのであろう。礎稿「花も十八」は「鬼も十八」ではなきや？

岡田―賛。

84　**酔たふりてもいけぬもの大晦日**

西原―借金取りに対して様々の策をねる。智を以って生酔に成る大三十日　一一・7

いずれにしても、うまくいかないようだ。

室山―賛。落語「掛取万歳」が唯一の成功例か。

　そら生酔てなんだ大三十日だと　一六・33
　作病を入れると四百五病なり　拾十・6

岡田―同。

・同人吟・

秀句鑑賞

——前月号から——

浜田久米雄

念入りに見られ定期も意地となり

山根白星

本人に間違いはないか、期限は過ぎていないかなどじっと定期を見つめられては少々癪に障らざるを得ない。意地になっているのは定期を差し出している人間である。ほんの瞬間の相手の動作がこうも人間の心をいらだたせる。心の動きは微妙である。

譲られた席老人と見られしか

故　福島鉄児

席を譲って下さったのはまことにありがたいが坐ってから自分を年寄りと見て譲られたのかと思えばすこし情ないような気もする。自分ではまだまだ若い気でいるのにと思う老人のひがみがこの句の中に噛みしめられる。

ささやかな夢あり齢ふと忘れ

本田恵二朗

この年になって持つ夢は大きなものではなく、ごくささやかなものだが、そのささやかな夢を実現させようとする心の張り合いは自分の齢を考えていないから愉快だ。すべからくいつもささやかな夢を持ちたいものだ。

忙しい忙しいと眼鏡を探し

原田一風

あまり忙しいので眼鏡をどこへ置いたのかわからなくなった。眼鏡が無くては次の忙しい仕事が手につかない——とつぶやきながら探している少々あわて者の忙しがり屋のユーモアが面白い。

幸せがいっぱい老婆熟柿吸う

香川酔々

この頃の子供は熟柿などは見向きもしなくなって来た。この句老婆が吸いつく熟柿であるから幸せがいっぱい溢れているのだ。老婆には子供の頃から親しみつづけて来た熟柿への甘い感傷がいまだになつかしく残っているのである。歯の抜けた老婆の口が目に見える。

胃を切った話しを聞いて胃がおかし

大坂形水

胃潰瘍かなにかで胃を切った話を細かく聞かされた。何十年も使って来た胃であるからには自分の胃も少々おかしいのではないかと思われる。病は気からとはうまく言ったものだ。

捨てるとこ捨てて人間丸くなり

越智一水

捨てて来たのは人間の持つ角の部分である。世の荒浪にもまれながらひとつずつ自分の持っていた角を捨て去って来るに従いその人間は角のとれた丸い人間となるのだ。まだ角の取れない人間もいることだがこれが人間修養の基本原則であろう。教訓的佳吟。

糸通す女の目にも年が見え

藤村メ女

針に糸を通すぐらいのことはわけなく通して来た女の目ではあったが寄る年波には勝てそうもない。糸が通らぬ女を見ている方もどかしいが、糸を通そうとしている女の心はもっとあわれである。

教えては呉れぬ手つきを見て覚え

葛城伊三郎

この句はあらゆるものの勉学、研究に対しての鋭い教えである。何事でも自分で覚えようとするならば手に手を取って教えてもらっては駄目で自分がその中に突き込むことだ。

・水煙抄・

秀句鑑賞

——前月号から——

正本水客

一瞬の宴枯葉は乱舞する

稲本凡子

私は曽て大糸線沿いの小谷温泉から笹ケ峰牧場へ抜けようとして秋の山道を小半日迷ったことがあった、前も後も右も左も紅葉の赤サッと風が吹くと足許の落葉が一斉に舞い上って辺りは錦の幔幕を張りまわされ、風が静まると又もとの静寂にかえる。真に一瞬のうたげというに相応しい情景である。この場合宴と枯葉の間は一字明ける配慮が欲しいし、枯葉は落葉にしたいと思う。

郷関を出て住み込みのパチンコ屋

岸本豊平次

志を立てて郷関を出ずと大上段に振りかぶった上五に対して、住み込みのパチンコ屋とは美事な肩透かしである。

洗い髪いつか別れた人思う

小谷葉子

別れ去った人と洗い髪との仄かな連想はドラマチックな何かを感じさせるが、いつかの語がこの句をあやふやなものにしている。

平凡に福寿草の鉢買うてくる

柴田恵美子

平和な家庭が偲ばれる。平凡にと云わない方がいい気もするが、作者のねらいは此の平凡にあるのかも知れない。

屋上の風に聞かせるひとりごと

松本文子

女心の楽しさよ、風は何色であろうか。

落葉にも温みがあった吹き溜り

大林曲ん手

温みは吹溜った落葉の発酵熱などと野暮なことは考えずに、浮世に吹溜った人々の労りあいと思いたい。

大それたことを葉書で出す度胸

中谷利美

どんな大それた事であろうか一寸楽みになるが、度胸と説明して了わない方がいい。

少年をだしに新聞休刊し

樫谷漫柳

近頃は何だかだと新聞休刊日が多い気がする。少年をだしには面白い。

秋を観て帰れば村も秋だった

大原葉香

観光ブームとやら、混雑する電車でバスで所謂もみじの名所に疲れて帰れば、村の入口の大銀杏が美しく夕陽に映えていた。

幕合いもなしに五十の幕があく

安藤寿美子

女盛りの四十代もアッと云う間に通り過ぎて五十の声を聞くようになった。幕合いもなしには適切である。

インフレという片仮名がつきまとい

藤原世史春

片仮名という3字の中へ、インフレという化けものを閉じ込めて了っている。

不況時にボーナス払える有難さ

栗和田清子

経営者としてのホッとした表情もうかがえて私もホッとする。

愚痴聞いて貰うて余計惨めなり

真山国彦

相手が同情して聞いて呉れれば呉れるほど自分の心は沈んでくる、それでいて人間とは独りでは暮せない勝手な生きものである。

経験を話して帰る見舞客

栗本藤持

同病相憐む、病気の先輩としての話も身にしみて、何となく快方に向っている雰囲気も感じられる。

▼**前号訂正**—P41の「受験前灯りが消えている不安」は**神夏磯道子さん作**でした。

万葉抄

川村好郎選

帰休とも知らずみやげへ子ははしゃぎ　八戸市　安田　紘
狂乱へクリーンパパの頼りなさ
残菜を盛った弁当萎まれ
締められるさだめにネジは生きている　東京都　宮崎美津子
おせちから消化剤までもてなされ
お茶漬を御所望正月とも別れ
だるまには罪ない両の目入れてやり
一瞬は良心揺らいだ拾得物　尼崎市　中谷利美
両親の画布に子供の夢がない
女ひとり生きねばならぬ花名刺
薄情と自分のエゴを棚に上げ
神域のムードは好きな無神論　岸和田市　池田露子
PTA視線あつめる五カラット
ネジ巻いて送って三食昼寝つき

舞う雪が波に抱かれる十勝川
東海の蟹も住めない磯に歌碑　大阪市　神夏磯道子
償いの心へ寒風ここちよく
金はなしだが春風はほっとかず
下積の勘に押された若社長
親元とゆう名目でたかられる　寝屋川市　柴田恵美子
厄払う心の杖にこよみ買う
順調なころは日記を書かぬなり
パンタロン舞妓もひとりの女にて
食費だけは出し親へ敷く一線　大阪市　稲本凡子
泣きついて来られて貸せばそのまんま
嫁がせて今年は一人の雑煮箸
元朝の風呂で自分を掘り下げる
正月は外す禁酒の但書　大洲市　横田放人

風変りな凧もあがって初春のどか
お年玉額を子どもに決められる
新宅へまずご先祖が移される
本性のまま伸びて庭木屋根を越し

和歌山市　吉野久子

松の内過ぎてはばまる資金繰り
満ち足りる日々平凡と愚痴る贅
集金も手形でがまんする師走
気の向かぬ話は忘れた事にする

柏原市　小谷葉子

欺されて欺して振子の企みか
喜びも悲しみも花輪で造られし
手鏡に写る疑惑の瞳と出会う
電話ボックスプライドが捨ててある

豊中市　高橋古啓

一輪の貫禄示す冬の薔薇
弱者と言う枠中にいる私
その先は言わんでもいい目が押さえ

岡山県　白岩文衛

せっかちとぐず私の裏おもて
町長の或る日は鯉に話しかけ
書き初めの妻は万葉相聞歌

今治市　蔦本昌道

ある炎孤独の殻で燃えつづけ
適当に恋を発散してマダム
二兎三兎追うて落ち目にある焦り

青森県　荒田つる

どっちともつかぬ素ぶりで茶をにごし
群衆にまじり孤独をかみしめる
帯だけを少うし地味にして出かけ

弘前市　小山内貞男

家中のモーターのような母の位置
人間の最后序列がやっと取れ
積木から夢がふくらむ三才児

和歌山市　樫村ふみよ

ねそびれた夜も救われる詩があり
留守になればいいとこ見えて来る夫
信号の青を忘れた小やけ雲

鳥取市　勝山紫宏

動かない金魚は冬を思案する
大晦日空の満月忘れられ
五十年やっぱり明日に引っぱられ

羽曳野市　麻野幽玄

腹の虫　鳴いて小さな　意地が折れ
作られる　歴史に戦さ　なぜ続く
冬の陽に　母の湿り　あった墓碑

大阪市　新川貞祐

手探りに黒豆を煮る核家族
肥満体柄気に入れば丈足らず
閑居にも初春が来たさんざめき

ポックリと死にたいなどと当てこすり
今治市　大本バット

子連れでも女は稼ぐとこがあり
嫁き給え四点セット特売中
東大阪市　崎山美子

発車ベル早やふるさとの故郷なまり
無理の上にまだ無理かさね娘を嫁かせ
内幕はいずこも同じ火の車
西宮市　山田喜代子

お正月息子の帰省が唯うれし
お正月台所に立つのが損なよう
七草粥老夫だけが喜んで
岡山県　船越洋之

老父母の老いに惜しんでならぬ金
ライバルの無口大きな影となり
ハンドバッグに女の知恵をしのばせる
大阪市　秋田茂

大人にはさせたくはない幼ない瞳
欲ばった金で地獄の切符買う
にごった眼にも美しいものはよく見える
吹田市　藤原世史春

悪夢さめて妻の鼾の頼母しく
主義思想の甘いとこだけ甜めた弁
あまりにも楪のわが名大きすぎ
豊中市　安藤寿美子

授りし福とは知らず過す日々
太陽を信じて雨の中を行く
鳥取県　林露杖

手のひらに開む温もり寒卵
どう果たす一億分の一の責
愛媛県　小山悠泉

貨幣価値なくとも金が物を言い
あくせくとして結局は喰べるだけ
新宮市　松田一郎

美しく美しく造花死んでいる
飲む会はきっちり出席して多忙
今治市　渡辺伊津志

上役のゆとり苦笑で済ましとき
海峡と語れば心海に溶け
新潟県　高野不二

節約の時代経験生きてくる
年金がふえたニュースで年があけ
寝屋川市　福富隆子

不断着のままで寝ている主婦の風邪
冷蔵庫満たして万余の金が消え
備前市　武内雅堂

口実を考えおんな和服着る
洗濯の泡何事も喋らない
大和高田市　岸本豊平次

「別れなはれ」で別れる程の仲でなし

青雲の意気が燻る万年床
和歌山市　秋月宏方

負けて勝つなどとはヤングまだ知らず
子がはたちもう父親と違う旗
羽咋市　三宅ろ亭

蕗のとう先ず顔出して春を告げ
すみません素直に言える嫁でよし
大阪市　小谷清女

パパパパと重たい腰呼ぶ電話口
温かい言葉交して冬の旅
橿原市　西本保夫

不況下の社運へアイデアかき集め
上役へタテつくわけではない意見
名古屋市　大林曲ん手

割箸を妻も同んなじ音で割り
静寂を求める京で疲れ果て
松江市　梅本登美也

ある時の六十　孫が邪魔になり
馬鹿になるかしこさ悟る老いの坂
西宮市　朝山千世子

初戎炬燵守りして無恙なり
雰囲気に酔うてわが家の灯を胸に
姫路市　大原葉香

輿信所愛の絆はしらべ得ず
生活の自信となった顔のしわ
寝屋川市　江口度

屑屋さん人の屑なら売りましょう
もつれ合うアベック不況など知らず
大阪市　横山正彰

幸福の手紙に気弱は思案する
男尊は変らず車中の座を占める
鳥取市　岸本無人

冬の陽がもったいなくて糸をたれ
着飾って出ればぬかるみよく目立ち
八戸市　島田昭治

良心のかけらもないよな儲けぶり
借金だけ残せし亡父なつかしく
大阪市　平井露芳

七十才明日より今日を強く生き
神仏へデモる不況の朝詣
今治市　古野伶人

重油もう沈む頃出る自衛隊
調子良過ぎて掴めない女
今治市　今井松花

大晦日硯の蓋も拭いてやり
ホステスも子供を連れて初詣
今治市　伊藤一郎

惜しがった筈花嫁の美しさ
蜜柑箱甘い順から腐り出し
泉佐野市　大工静子

七人目の孫老ぼれてはおれず
伊丹市　樫谷漫柳

いい嫁も半身不随が疲れさせ
伊丹市　樫谷漫柳

祭神に係わりの無い初詣
米子市　江原良二

不甲斐なさ責めてるようなにらみ鯛
米子市　江原良二

学芸の主役の事で家族もめ
金婚

金婚
鳥取県　福田陽山

五十年此処まで漕いだ浮き沈み
鳥取県　福田陽山

初詣でテレビで乗った気ですまし
岡山県　長尾保

寒い年せめて春風暖たかく
岡山県　長尾保

楽そうな儲けに見える駐車場
鳥取市　大塚豊生

せせらぎの春を見付けた猫柳
鳥取市　大塚豊生

金盃の由緒へ下戸もぐっと干し
新宮市　熊野渓水

定年の駅を始発にする切符
新宮市　熊野渓水

あきらめてますよと期待してる顔
新潟県　市川一峯

本心を隠す笑顔が見つからず
新潟県　市川一峯

テレビ入れ完全隠居の部屋とする
鳥取県　伊藤静枝

新首相語る抱負はごもっとも
鳥取県　伊藤静枝

五十年イメージチェンジに髪を切り
鳥取県　加藤茶人

自転車へ無事故を祈る注連かざる
鳥取県　加藤茶人

肚割れば互いに詫びる気にもなり
河内長野市　井上喜酔

崩れてはならぬめでたい席に着き
河内長野市　井上喜酔

散髪もせず正月できる歳
大阪市　須浦つね

昭和五十年羽子板忘れかけ
大阪市　須浦つね

渋柿が忘れられてる山の裾
大阪市　花田繁子

金よりも愛情欲しいとなげく人
大阪市　花田繁子

人知れぬ悩みがとけてひとり笑み
大阪市　村島秀村

物乞いが来て社会見学した気持ち
大阪市　村島秀村

猫の手もかりたくも無い年の暮れ
高槻市　竹内花代子

八回の卯の年迎えお正月
高槻市　竹内花代子

売薬も買い揃えて大晦日
新見市　吉田落猿

チャンネルは夫の留守のメロドラマ
新見市　吉田落猿

手内職春待つ話とぎれない
大阪市　堀口欣一

還暦へ一つ覚えのさのさ節
大阪市　堀口欣一

堺市　堀畑日々子

母と二人何かたりないお正月

大宇宙のぞく望遠鏡へ片目

初詣人丸神社

二代目の盲杖桜頼よられず

人生は九回裏まで夢を追う

インフレに負けじと庶民剣が峰

三木船長に進路まかせて日本丸

孤り居の夜に侘びしい細雪

父も子も同じ願いの春を待つ

感情の高まりそっと外気吸う

鈴振れば幼き夢がこぼれそう

三千年不動の像よ何語る

大手術明日という友泰然と

滋賀県　柚木踏草

尼崎市　小林文月

大阪市　坂本喜洸

今治市　園部正則

大阪市　内藤ますゑ

出雲市　藤井晴月

富田林市　奥井春子

宝塚市　吉田とんぼ

鳥取県　松本文子

島根県　岩田三和

倉敷市　高山みどり

兵庫県　高橋近江

珍客へ話題を探す間の無口

旅の初風呂鶯の声を聞く

玩具部に狙われているお年玉

明日はまた明日の風吹く燗をつけ

重い物さげてしみじみ思う齢

総会が何時もの声に引きずられ

これ以上ケチにはなれない空を見る

心中の虫もやもめになって呆け

二つ三つさばを呼んでる顔の皺

雑草の芽も春陽見逃がさず

実印を捺すようパパ似の子が生まれ

アジサイの漢字忘れて悔いもなし

尼崎市　駒村岳麓

今治市　真山国彦

堺市　栗本藤持

島根県　飯塚虎秋

鳥取市　田村仁吉

高知市　竹崎寛

尼崎市　大垣たもつ

松江市　岡崎雪美

高槻市　山田スミ子

堺市　檀野茂子

岡山市　西田溥子

★お願い―句は本社の柳箋か、原稿用紙半分に楷書で書き、エンピツなら4Bにしてください。淡いエンピツは困ります。

座談会

柳界二匹の鬼

出席者
時実新子
定金冬二
中尾藻介
岩井三窓
窪田久美子
三井酔夢
有信新之助
板尾岳人
橘高薫風

薫風　今日は川柳塔のカラーと大いに異った個性をお持ちの時実新子さんと定金冬二さんのお二人をお招きして、後藤梅志句集の編集出版にご尽力戴いた中尾藻介さんに聞き役という立場になって貰って、われわれに不足しているものを大いに吸収したいと思います。よろしくお願いします。新子さんは昭和四年のお生れで川柳歴は略二十年、その間、ふあうすとの同人、川柳研究の幹事、川柳ジャーナルの同人、その他川柳春秋などで充実した作品を発表し続けて来られたのですが、ふあうすと、川柳研究、川柳ジャーナル、皆退会され、私のように「ぬるま湯」にたっぷり浸っているのではなく常に緊迫感というか意気地というか、そういう根性を持ち続けておいでですから、それが作句の原動力になっているように思えるのです。人類にしても、戦争とか飢饉というものがあれば、文明が著しく発達することを思えば、われわれに一番不足しているものは、これじゃないかと思えるのです。新子さん、最近切実に感慨を深くされたというようなことから。

新子　人間との触れ合いというか、「人と人とは相会うべきだ」と思うようになり、その出会いから、「本当を与え、本当を貰う」ということの大切さに思い到りました。

薫風　もう少し詳しく…。

新子　人生とは束の間の夢であって、それは一つの旅であって、旅は孤独に決っています。また作家には一人の姿が最も似合います。けれど一人は自己愛を増長させ掘る穴は深くはなりましょうが如何にも狭く、己れ一人しか通れません。元来横着者の私が去年あたりから人に会うことはよいことだと考えるようになったのは、会って話せば誰方も宝石のような私に無いものを持っておられる、これを盗まずして終るのはまことに損だと気が付き、今までの自分の思い上がりにガク然とした訳なのです。

薫風　どう云う方達とお会いになったんですか。

新子　先ず、瀬戸内文学という文芸誌を編集なさってる女流の小説家の方ですが、詳しく云うと長くなりますのでかいつまんで申しますと、その方の小説を読んで、私の友人まで批評を書いて出したところ、ご本人の目にとまり、早速その日のうちに四国から海を渡って姫路までお出でになったのです。夜を明かして語り合ったのですが、そのバイタリティには感心させられました。本当を与えて本当を取る根性に圧倒されたのです。

酔夢　その方、私もよく存じあげていて、私の家ででも小説や川柳について話し合います。

新子　川柳については観念句の弱さと、連作と群作の違いを、何よりも一句に据える心の在り方を教えられました。川柳家以外の方

から聞く川柳論はとても新鮮なのです。

酔夢　「俳句研究」へよく川柳作品を出しておられるのを拝見しますが…。

新子　赤尾兜子さんから「私の見た現代俳句」なる一文を書けと求められていますし、俳句公論の小寺正三氏の依頼で〝川柳と俳句の問題点特集〟にも小文を寄せました。

酔夢　薫風さんも俳句公論にお書きになりましたね。川柳人でも違った観点からのものですから較べて見て興味深いです。

新子　私が俳句を見る場合どうしても川柳を下敷にしてしか見ることが出来ませんので、正直な発言が川柳可愛いやになるのは当然です。物よりも人間に、自然より人間社会に興味を持ったから川柳を選んだのです。今や俳句はやたらと人間に興味を持ち、川柳は安易に季にもたれて上品ぶったり、ポエジーを形の上に求めたりして境界線があやしくなって来ました。短詩無性論もありますが、私は絶対に有性論、川柳は川柳でありたい、そのために忘れてならぬ姿勢を守りたいとする者です。

藻介　それでは「これが川柳だ」と云える絶対的なものは何だとお考えですか。

新子　それは批判精神です。自己告発を通して社会を告発する眼です。くだけて云えば性悪根性です。その手法、その深さ、その点に於て俳句は質量ともに一日の長がありますから、川柳がこれを凌ぐには、川柳家は泥にまみれることです。小さな悪の芽を拡大して小さな善の芽を拡大する俳句に立ち向かうことです。あらゆる文芸にたった一行の川柳が勝てるのは自己告発と批判精神を措いてはないと思っています。これは極論ですが、誤解を承知の極論でなければ守り切れぬ処まで柳俳は歩み寄っているのではないでしょうか。

薫風　路郎先生も、私が初めて不朽洞をお訪ねした時「川柳の定義を一口で云えば」と無暴な質問をした時、「批判詩だ」とご教示下さったです。そういう川柳界に住んで作句を続けているのですから、発想、手法、多少俳句に近くても、やはり俳句と異るところがあります。ここにお出での窪田久美子さんは川柳、俳句両方なさっていますが、両者のけじめはつけておられる筈ですし、ある時、その久美子さんの作品について、私が

いつわりを庇うかたちで足袋を履く　久美子
花束を解けばそれぞれ火の縞　久美子
闇は今富士のある位置脱東京　久美子

など、川柳作品はすばらしいのを作られるのに、青玄誌上に掲載される俳句は、碌なのがありませんね、伊丹三樹彦氏に云ったところ、俳句作品は川柳より余程いいと仰言って、双方護らなかったことがあります。柳俳は隔然としてますよ。

久美子　川柳だけ作句していた時代以上に、俳句もやり出してからと云うもの、柳俳の区別がしっかり意識に上って、全く別のものだと分って来ました。そして私には数等川柳の方がむずかしいのです。川柳は特殊な生活や境涯の人には、特異な体験からのものがすぐさま詠めてしかも心を打つ作品になりますが、一般のわれわれには、俳句のように、見たまま感じたままの美的感動だけですまなくて、屈折させたり、抵抗感や怒りやら、新子さんの云う自己告発やらを盛らねばならぬのですから。

藻介　それじゃ、ここで冬二さんに登場願って新子さんの「川柳根性悪論」の論旨を具体的にほぐして判り易くして戴きましょうか。冬二さんも追従を許さぬ悪党の一人と自認されていますから。

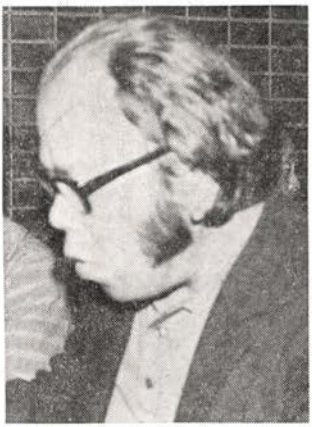
冬二　無茶云うなよ。努力の上に努力をしとる善玉だよ。

岳人　新子さんの句集初めて見た時には驚きました。何とえげつない女性がいるもんか。

藻介　旦那さんを殺したり…。

酔夢　**淵を這いあがる女は突き落とせ**　新子

黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般
合資会社　西出螺子製作所
大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL (76) 三四五二―四
夜間 (762) 四四〇八



定金　冬二氏

淵を這いあがる男は見ていよう　新子

なども感心します。

新子　併立でどないもならん句です。

酔夢　両句相撃ち、相擁して凄い効果出してる。

岳人　私が川柳を作りはじめた頃で、仕合せいっぱいの句にしか目が向かなかったので、印象強烈でした。

新子　あの句集から、ああ淋しい哀れな女が一匹いると見て下さったらいいわけ。

藻介　人間の内面夜叉を描いてあるわけですね。私も句の上で親を殺しましたよ。親とか肉親だから殺せるのですよ。

冬二　殺すので思い出したが一寸面白い句がある。

うつくしい顔よと思う人ごろし　新子

というのです。そして私のに

握手してとても淋しい人ごろし　冬二

がありますが、これが新子の真似だと云った人がある。そして、こういう残酷な句を作る必然性がないとも云う人がある。併し、新子さんの作句意図は知りませんが、私のは、私が人殺しをし、又、殺されるのも私なのです。私の内面葛藤の吐露ですのに、人殺しと云えば殺人以外の事は考えない人が多いのです。そういう目で見られると作品はもう死んでしまいます。自分をいじめる句が私には多いのです。戦前に、

母へまず捕まりました人殺し　水府

という作品があったのですが、戦前では人殺しと云えば驚天動地の大事件だったのです。今はどうです。ロッカーの中へ子を捨てる時代です。ハイジャックと云えば、最初のうちはえらいことする奴がいるなと胆を冷やしたが、屢々起きるうちには、又か、ですませてしまうようになります。そういう時代に生きて作句する人間ですから、今のいのちを見つめなければいかんと思うのです。痛みを感じる作品でないと、次代の若者に川柳が引き渡せますか。ついて来んですよ。

藻介　私も常に感じていることですが、職務柄（刑務所職員）受刑者を見ていますと、何ら私と変ったところがない。明日になったら私と立場が替るかも知れんと思えるのです。ところが、そういう風に感じている人が職員の中には意外に少ないのです。われわれ現代人は、一寸先は闇だという危機感は常にある筈です。

新子　私の場合、

死顔の美しさなど何としょう　新子

という以前の句をうけているのです。人殺しの句もそうだけど、先程の二句併立の「淵を這いあがる」句なども優しさの真髄の作品ですよ。美人の妻を持ってなど云ってられるうちは岳人さん、まだまだ優しさも仕合せも浅いもんなのですわよ。

岳人　あの頃はそういう句より出来なんだ

新子　それはそれでいいのんよ。皆そういう場所を通って来て苦労して高い山へ登ろうとするのよ。

藻介　人間、愛の強い人は憎しみもきついのですよ。だから夫を殺したり不合理なことにまで立ち到るんです。それを、えげつないとか不道徳だとか、修身的なたてまえから批判して嫌悪感を抱く人が多いのです。

蕪風　新子さんの句は、川柳塔の人も嫌悪感を抱く人の方が多いでしょう。分らんと云う人も多い。路郎先生が晩年、最後の友達にしたいと云われて、新子さんを大いに買っておられ、赤穂御崎ででも会いましょうと仰言りながら、実現出来ず亡くなられたけれど、川柳塔の作家の多くは、私も込めて、「人間陶冶の詩」を修身的なものに曲解しています。川柳をしめ木にして、悪汁を出さなあかん。そのあとにさわやかな人間性が出来上ると仰言ってる。人間陶冶と「人間陶冶の詩」とは違うんですわ。

新子　岳人さんが仰言る甘い句しか出来ん時にはそれでいいのであって、それまでいかんとは云いません。ただその時その時、その人の正直なありのままを句にすると云うこと

が大切な根本になることだと云うのです。本当を積み上げた時に現在の自分があるわけで、冬二が良いから冬二の真似をするのは冬二の亜流になってしまいます。文芸は先ず模倣から始めると云いますから初心時代はそれでいいけど、いささかの習練を積まれたら、岳人さんはあなたの句を物にしなくちゃいけないのよ。上手下手の域を出て、川柳作家岳人の味がにじんで来るのね。

岳人　冬二・新子の句ははじめ分らなかったが、この頃分るようになって来た。やはり、絶えず作品に接して分ろうとする努力を積まないと理解出来ませんね。

冬二　この頃の作品には飾りが多い。本物の作家と云うのは、自分が思ったことをすっぱり云い切ることが大切です。

新子　天根夢草さんの句に、

訃を聞いて弾むこころがありはせぬか　夢草

時実　新子氏

があります。気の毒だと思う反面、何か人間、喜ぶ気持がありはせぬかと思う、心のきざし。ここを掴め出せたのだから夢草さん流石やなと思ったのです。その時点で、誠に正直だったのね。こういう飾りのなさが美しいと思うのです。

薫風　岸本吟一さんも、もう三年程も前になりますけれど、私が「あなたの河童の初期の句、

馬車の上あゝあの人が偉くなる　吟一
長崎は初旅にして磔につく　吟一

などの句はすばらしいですね」と賞めた時、「又、いつかああいう句を作るようになるかも分らないけれど、現在は社会批判以外の作品は私には考えられません」といってられました。作りたい衝動、作らねばならない意識というか、新子さんが屢々いわれる川柳魂ですね。それを持った人やなと感じた訳です。

新子　それが、その時点その時点の本当の積み重ねですね。嘗つての三窓、嘗つて吟一はなど云うのはちとおかしいのよ。

岳人　新子さん冬二さんだけでなく、この頃面白味のある句少くなりましたね。

藻介　あちこちの句会でユーモア賞いうのやってるが、浅いユーモァしか理解してないようですね。

薫風　藻介さんのにはユーモァが多分にあります。昔の、

恋人の気弱へピアノぐわんと打ち　藻介

は、私の初心時代頭をそれこそ、ぐわんと打った句で、

わらうべし父の胸なるモンロー忌　藻介

は、そこはかとなきユーモァの奥に深い男のペーソスが感じられます。

モンロー忌聖なるものは遠くなる　藻介

も心をそそりますね。

冬二　モンロー忌をやりたいな。

新子　ええなあ。

藻介　以前にもやろか云うてたことあるんですがね。八月五日です。一九六二年八月五日午前二時、秘書がその死を発見したんで、ひょっとしたら四日に死んではったかも知れんとこです。生れは一九二六年。

薫風　よう覚えてはる。モンローの大きい写真掲げてあんなええ句作りはった藻介さんとこでロマンチストが集って……。

藻介　モンロー忌うちでやったら奥さんに叱られますがな。（笑）さて、新子さんは大した人やが、冬二さんこの人も又、怪物ですわ。句会で句の抜けること抜群で…。

冬二　句を作るいうことは執念の一語に尽きるね。

藻介　以前に聞いたことですが、川柳大会が近づくと幾日か仕事を休んで兼題と取り組むとのことだったですが、作句の苦心談を。

冬二　冬二はすぐ句が出来ると思われると困る。何でも筒一ぱい努力する。題を並べて書いて一題五十句を作る。五十句の枠を作ってあって一ぱいにならぬと次に進めぬと決めているんです。初心時代からこれが続いてるので余り苦痛でない。時には一題三十句にずぼらする時もありまが、まあす滅多にはしな

い。その中から三句出すのだから選に入らぬことはおかしいのです。

藻介　題詠で最初に浮かんだ想は捨てろと云われている。それは類想の概念的なものが多いからだが、三十句五十句と作れば客観性もあり、選者の傾向に合う句も多くあるでしょうから必ず入選するわけですね。

冬二　抜けん方がおかしいと思っています。

岳人　えらいなあ。

冬二　一題五十句が基礎です。若い柳人が句会に遅れてくるのなどもってのほかだと思います。そして、三句作ればそれで足れりと雑談などに時間を使うのも情ないことです。

藻介　だから入選率が高いのですね。

冬二　三句作って、一句二句入れば入選率高いが、五十句作って三句全部入選しても、率は低いわけですよ。

藻介　作句時は課題が頭にあって次々浮かんでくるのですか。

冬二　そうです。題詠は題を捨てるわけに行かんので勿論頭に置き、選者は意識しない。とにかく五十句のうち同じような想もダブる。つまらんものでも書いておくと次の飛躍につながる。句が作れぬと云う人は、先ずペンを持って句を書くことですよ。句が句を呼ぶのだよ。おい薫風、見習えよ。（笑）五十句のうち二十句は自分でいいと思える。

藻介　気に入らんのは消して、それから選者を考慮に入れられて出句される。中には冬二らしくないのもありますが…。

冬二　それに選者を恐れ入りましたと屈伏させてやろうという意気込み。

藻介　選者が兜を脱ぐというのは、三彩佳作に取ることだから…。

冬二　いい選者にはいい句が集る。投句する側から値踏みされてこの選者とは対話出来ぬと見限られるようでは駄目で、一番大切なのは選者なのだから…。名作家は名選者である筈だ。

三窓　選者は雑学の大家、浅くとも広い知識が必要。作家は範囲狭くとも深いところまで洞察することが大切。選者云うのは大変な仕事です。才能と勉強が必要で選者に専念して欲しいと云う程のものです。

新之助　選者は江戸時代のように専業にすべきではないですか。句は作らなくとも良い選だけをしてくれればいい。

冬二　いい作家、いい選者というのも、その柳社の中での話で、さて日本柳界に出してというのは少いでしょう。広いところで通用する選者は、やはり好作家に違いない。

新之助　新子さんは第一級の作家やけど男から見たら範囲が狭い。そやから深い句境に達せるのだろうが、男と女の違いというのを感じますね。

藻介　選をされても意外に狭いと感じますが、それは句が良くないということですよ。いいものは取られている。それでいいわけです。

新之助　女の方は一つのハンカチを四角や三角に畳んでるというだけで範囲がせまい。特に社会的なことには疎いようです。男は、テーマをつきつめて行き難い。新子さんが女の業を、まあそれだけでもないでしょうが、女の業を詠い続けておられるように自分も何か一つテーマを作って追求したいと考えた。何にしょうかと思い迷ったが結局「男のエゴ」よりないと思って作ることにしたんですが、続きません。男は色々な他のことにも目が散ってーカ所に目をむけてられないわけです。絶えず新しい方へ目を向けんならんの

北川春巣著

『聴診器』

川柳随筆と句集

われながら完全癖に腹が立ち　春巣

この句が示すように著者は完全をモットーとされている。数ある随筆の中からより抜いたもの十六篇、川柳は四十年間のうちから三百句を自選し、ここに「聴診器」を発刊されることになった。

（美麗豪華本）

好評発売中

送料共　千円

発行者　〒573　枚方市渚東町二九ー二　北川春巣

取次　川柳塔社

で、間に合わんと云う気がしてくるのですわ

新子　女が社会的事象に関心が薄いと見られるのは新之助さんの思いあがりで、石油危機や何やかやの現代、生活苦は男性より切実なのですよ。

薫風　「男のエゴ」も「女の業」に負けぬ程のテーマとしては大きなええテーマだから、物にしたらすばらしいよ。目が散るというより、才能と執念の問題になってくる。

冬二　執念が又出て来た。さき程私も云ったが、私が執念の塊みたいになったのはこういう時からです。それは、麻雀しに行って徹夜しとった時に外で火事や火事やと騒いどる。どうも方角がおかしいと帰ったらわが家が燃えとるんや。その焼跡に立って、何も無くなったが、私には川柳が残っとると思ったんです。

薫風　家をもう一ペン建てんならん思わんと、川柳しかないと思うたんか。

冬二　家のことも子供のことも思わなんだな。いよいよ川柳に精出さんならんとだけ思うたな。

薫風　鬼やな。このお二人、川柳界の赤鬼青鬼やで。だから一題五十句云うようなとてつもないことを続けられるんですなあ。ところで、その赤と青の鬼の句だけに、われわれ川柳塔仲間では分らんと云う人が多いのですが…。

漠介　新子冬二の作品が分らん筈ないのですが…。分らん句と云うのは、例えば橋が出て来た時、普通の橋なら分るが、人生を暗示しているとか、匿れたものが理解出来なくて分らないのや、つながり的なもの、二者衝撃での表現法を、あたりまえの橋だと思うと分らなくなるし、作者の手法が描くて分らぬのもあったりして理由は色々あります。二者衝撃法など理解するには勉強して戴くよりほか手はないのですが、分り出すと、作者の感覚的なひらめきとぴったり共鳴出来て、「これがこうして、こうなった」という句より以上に深い鑑賞の喜びを味えるのです。

冬二　川柳界での多くの人は、皆答が出てしまっている句を作っている。作品の一節一節一語一字には、関係がないようであって絶妙なつながりがあるということがあり、一プラス一イコール二・五にも三にもなるのが文芸というものです。

漠介　新子さんが川柳界で最初に、列車といっても走っている列車でなく、列車を築りて何か心象を暗喩する方法をはじめられたが、その理解が仲々スムースには行かぬのでしょう。

三窓　難解の句に出会っても劣等感は持たんでよろしい。その大半は作者の力量不足である。

冬二　作者は作句し、選者が入選させた句だ。鑑賞者の勉強不足である。分らん句に会ったら先ず自分に能力がないのかと反省をすべきです。

三窓　作者表現の拙さです。

漠介　最後は選者の問題に繋がって来ますね。ところで三窓さんは題詠に対して…。

三窓　冬二さんの発言聞いて驚異を感じますね。でも初心者にはいい教訓になります。私は句会場に行ってからです。ぎりぎりにならんと出来ん。雑詠も締切りにならんと…。

薫風　私も三窓型でやってますが、作品でも文章でも、チャンバラで追いつめられたサムライが、絶壁をうしろにして、多勢の相手をバッタバッタ倒すようにやって、それで不思議に出来てしまうのです。まるで私の血の中の、ご先祖や先輩が力を貸してくれるのかと思う程…。

新子　その感じ分るなあ。

薫風　新子さんも…。川柳ジャーナルに掲載された、「吉井川五十句」は何日かかったですか。

新子　一晩の徹夜でです。私も作品は気分の乗った時一気に書くのです。あれも、あとの推敲などの検討には二、三日かけましたが…。冬二さんは無器用なのよ。

薫風　血液型の違いやろ。

冬二　ご先祖も違うんや。（笑）

女の句

菊沢小松園

火の気ない所に煙立てたがり
灯を消して女しばらく物言わず
裾の線きりようと別に美しい
欺してるつもりは女の方にない
その内にわかると女泣きくずれ
嘘でない証拠を女あせり過ぎ
崩れても愛なき人の子は産まず

百人一首と川柳（9）

富士野藤馬

一五　光孝天皇

君がため春の野にいでて若菜つむ
　わがころも手に雪はふりつつ
（古今集）

この御製は、帝の皇子時代の御作である。歌の文句を借りて、

うぬがため春の野に出るなずな売り
（一六2）

畑と田で衣のぬれる露と雪
志丸（三八15）

雪と露せいて衣をまちがへる
是非（四〇6）

―田の露は天智天皇

と詠まれ、また

孝のつく二人どちらも君が為
麹丸（一四〇2）

「君がため」と詠んだのは、外に藤原義孝（五〇）がある。

光孝天皇は、仁明帝の皇子時康親王と申したが、陽成帝御退位のあと、藤原基経らに迎えられて、元慶八年（八八四）五十五才で御即位、仁和三年（八八七）崩御になった。

一六　中納言行平

たち別れいなばの山の峯におふる
　まつとしきかばいまかへりこむ
（古今集）

行平は、平城天皇の皇子阿保親王の子で、業平の兄である。天長三年（八二六）に在原の姓をたまわり、斎衡二年（八五五）に因幡守、元慶六年（八八二）に中納言兼民部卿になった。そして寛平五年（八九三）に七十六才でなくなったのである。

文徳帝の時（八五二―八五八）事あって、須磨に謫居していた時、松風、村雨という二人の汐汲女を愛していたという物語は謡曲にもなっている。それがまた多くの川柳に詠まれている。

気ほうじに須磨寺へ来る中納言
（一一30）

中納言名ある女性を二人しめ
（一〇9）

おもしろく塩をふんだは中納言
（一六7）

腰蓑の上からつめる中納言
（二5）

行平ばかり面白く塩を踏み
融（筥四19）

行平は汐汲桶を仮枕
如雪（一一五30）

両方へ尻目をつかう中納言
静寿（八一27）

松に時雨を染めたのは中納言
竹庖（五四14）

行平は五風十雨ときめたろう
木賀（三九41）

姉妹の中へ寝るから中納言
（八39）

顔に似ぬ物喰いのいい中納言
（安元仁6）

行平の噂はたった二人ゞなり
（二四16甲）

―弟業平は多くの女をしたが

行平も松ヶ岡ほど居て帰り
苔江（傍二12）

―三年

中納言別れの時は立ちのまま
（四7）

行平は磯へ二声いとまごい
（明三濱1）

行平の帰洛膏薬売のやう
（安二亀2）

―焼けた顔

この謫居生活は三年間ほどであったようである。それから因幡へ赴任した。その途で詠

んだのが「たち別れ」の歌である。

また歌の文句取りに

松とし聞けど帰り来ぬにしの旅　三補（一二八13）

松風へばかり一首の立わかれ　雨夕（三二31）

立別れかね姉妹をなだめてる　（寛元誠1）

というのがあり、

兄弟はしじみと鍋に名をのこし　シクト（三五37）

行平で業平を煮る庵の主シ　錦袋（七二19）

業平を行平で煮る梅見船　仙（七九26）

業平を買つて兄貴の鍋をかり　花菱（二一〇37）

などと土鍋のユキヒラと、業平橋の蜆とを、兄弟になぞらえて戯作されている。

一七　在原業平朝臣

ちはやぶる神代もきかずたつた川
からくれなゐに水くくるとは

この歌は「古今集」秋の部に「二条の后の春宮の御息所と聞えける時、御屏風に、立田川に紅葉流れたるかたをかけりけるを題にて詠める」と詞書してのせられてある。

業平は、阿保親王の子、母は桓武天皇の皇女伊都内親王だから、行平の腹ちがいの弟に当る。天長二年（八二五）に生れ、翌三年、行平と共に「在原」の姓をたまわった。在原氏の第五子で、右近衛中将であったから「在五中将」と呼ばれた。元慶三年（八七九）には蔵人頭となり、翌年五十六才でなくなった。

業平は、容姿秀麗で、情熱家で、天才的歌人であった。その事跡は「伊勢物語」に書かれてある。六歌仙にも三十六歌仙にも入れられている。

色男歌仙と百で花紅葉　花夕（三七31）

と川柳に詠まれ、右の歌は紅葉で、三十六歌仙には

世の中の絶えて桜のなかりせば
春の心はのどけからまし

と花の歌である。また、

いろ男百の内では神祇なり　（三一3）

六人のうちいい男いい女　（安九仁2）

蛤も蜆も見える六歌仙　有幸（三四26）

―いい女、蛤は小町

とも詠まれている。

歌の文句を取って、

千早振る神代にもないいい男　的丁（五四9）

娘どしかけにしてとる千早ふる　清江（三一7）

からくれないに水くくる朱の橋　於兎丸（一四一3）

からくれないに水くぐるむごい事　玉章（四七29）

神代もきかず水くくる繁花の地　常真（五二34）

神代にもきかず業平大蜆　松魚（一四〇3）

水をくぐって業平で取って居る　里梅（五四33）

本所業平橋の名物蜆にかけても作られている

百の中色師はらからならんでる　翠穂（宮初11）

と兄行平と並べられていることをよみ、どちらも色師といわれている。

藤原氏との対立で、中納言藤原長良の娘高子が入内するのを阻み、高子を盗み出した恋愛行は「伊勢物語」に書かれ、有名な話として伝わっている。

芥川神代もきかぬふらちなり　（拾四22）

芥川どっちも逃るなりでなし　（三四4）

足弱をまめな男がつれて逃げ　（一九14）

やわやわと重みのかかる芥川　（初31）

業平は高子（二条の后）を背負って、淀川の支流芥川まで逃げたが、そこで追手に捕まり取戻された。それから東下りとなった。

あつま下りと名にいへどおい出され　（天七10・5）

五人目のどらは吾妻へ旅をさせ　（天四義2）

業平は、河内の高安の里に女ができて、毎夜竜田山を越えて通ったが、奥方の歌

風吹けば沖津白波たつ田山
夜半にや君がひとり越ゆらむ

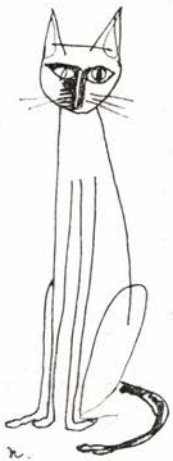
に感じて、高安通いをやめたという。

御夫婦の名歌立田の川と山　柳下（七三11）

このほかに業平を詠んだ川柳は非常に多い

生駒から

麻生葭乃



―不二田一三夫宛

「苦情きく時は敬語の小役人」を各地へとりました。

年賀状がいまだにボツボツ拙宅へ参ります。局の事務の停滞かもわかりませんが、配達の途中で人に盗まれたり、束のままで道路へ捨てられたりするよりはよっぽど有難いと思わねばなりません。

松すぎた賀状うやうやしく受ける

と私はある人に書き送りましたが、何だか嫌味を云ってるようにも聞えますけれど、松すぎた年賀でさえも書かなかった私の方がよっぽど横着者の責めをおわなければならないのです。

今日突然（〒七四四―〇一）山口県下松市花岡高塚にお住まいの田村鼓と云うお方からハガキが参りました。元大阪の住人、徳田双柳と云うお方で、大きい柳の大木のあった鳴尾の家へ高見柳骨さんと一緒にリリが生れて二三カ月頃にお越しになったとか、今は広島の病院へ入院中の吉川亜人氏とも文通していられるそうです。この方も高見柳骨さんも南海電車の太田朝陽さん（古い柳人です）に誘われて川柳会へ来ていられたらしいのです。今は下松市の多宝塔川柳会で川柳を楽しんでいられます。昔の徳田双柳さんは現在は山口県下松市花岡高塚田村鼓となっています。むかし私が知っていたお方や又大変川雑時代につくして下さったお方達はどうしていられるのか消息はわかりませんが、川柳に最早熱を失われたお方もあれば、まだ埋み火程の熱は残っていても、精神的に或は物質的に面白からぬ方々もあろうかと、それを思えば人の世の移り変りや大自然の成り行きにうたた無情を感ぜずにはいられません。人生常なき事を悟り切るにはどうすればよいのか、人間は修羅の巷にあえぎながらも彼岸の遠きをかこつ亡者の姿で生涯を閉じるのではなかろうかと、ションボリ窓の外を視て座りました。

一月廿八日　麻生葭乃

不二田一三夫様

☆

前略――ハワイの戦前はハワイ諸島を「川雑」でぬりつぶしていました。ウイロー社の方々もまだお若くていらっしゃいました。そもそもハワイの方に私が文通をはじめましたのは高沢一浪さんでした。

一浪さんは最初「近作柳樽」で一句か二句の入選者でありましたが、私はこの人はうまくなる人だと思いましたので私からお手紙を差し上げたのでございます。手紙の内容は覚えていませんが「今、私の机の上にはガーベラが真赤に咲いてます」とか時には猫のこと

前略―今日は鉛筆でかかして下さい。万年ペンのインキが出なくなったので、インキ壺を机の片隅へ置くとひっくりかえしそうなので肩が凝ります。

各地欄は各地方の句会が単位でありますから出席者のメンバーの句は出来、不出来を問わずに顔を並べねばなりません。五句も六句も秀句があっても一人一句で、その中からたった一句だけを抜かなければなりません。又没にしたらよいと思ってる句でも、句会のありかたを示す為には出席者のお顔は並べなければなりません。多くの秀句を捨て去ることは各地整理者の辛らいところだと思います。然し各地欄は句会を単位としての発表欄でありますから、それは是非もないことと思うています。南海の「苦情」の選の時も十止庵氏には

「聞いておくだけの苦情に小半日」

「秘書にメモさせて苦情に遠くいる」

「国民の苦情外車で聞きにくる」

などがありましたが一番一般にわかり易い

もかいたり日常茶飯事の事をこまごまと書き送りました。

私の手紙は月に一度は七千キロの海を渡って一浪さんのお手許に届いていました。其うちに一浪さんはハワイの新聞社に古川風竹さん、古川魔花麗さん、前山北海さんなどの飲み友達が出来ました。句も段々うまくなられた。一浪さん独特の句を作るようになられました。一浪さんに飲み友達が出来てから、私はその飲み友達の方々へも月に一度は必ず永い手紙をかきました。新聞社のお友達とも親しくなり川柳ウイロー社第一世の方々のお名前は今も忘れずにいます。

魔花麗さんは毎月、ラジオの豪華版を一歩（先生の令息）に送って下さったり、又私へは色々と変った雑誌を送って下さいましたので私は少なくとも五年さきに先進国の新知識を獲得することが出来ました。風竹さんはよく珍しい切手も送って下さいました。御恩になりっぱなしでいまだに何のお返えしもしていません。

「夕顔の種子とはっきり妻の筆」という一浪さんのお作を見て一浪さんは奥さんを亡くしていられる事を知ったのです。この句には作者の淋しさをじかに現わしている。形容詞はちっとも使うていませんが亡き妻を偲ぶ切々たるものが出ています。一浪さんの風格を継いでたたれたのが内藤草一郎さんでありましたが、自動車事故で亡くなられました。私が発送カードや事務の通信を持つようになりましてからは、私が筆を持てば前金ぎれのハガキか会費の督促でありました。二三年も誌代のおくれているお方へはご事情がわからぬものですから、原稿紙五枚位にもわたる送金の御依頼状を幾度か出していました。夜おそく外廻りの仕事から戻って来て夕食をとって事務にかかりますと午前二時でした。

其頃の私の睡眠時間は約四時間でした。この年齢になってもう同じことは繰り返えしたくはありません。数字に弱い私が、句会場の会費受付けの机に座っている姿を知っていられるのは川柳塔社の古い方々だけでございます。雑誌の仕事も商人と同じこと、根気で押してゆかねばなりません。知らぬまにツイながい手紙をかいて終いました。

麻生蔑乃

二月四日

不二田一三夫様

批評・鑑賞と作句

中川晃男

音楽にしろ、美術にしろ、文芸にしろ、作品として一本立ちした以上は、その人の手を離れて第三者の公正な耳目に委ねなければならない、というのが宿命である。然し反面、この人の作品だから—と作者を中心にした見方も成り立つであろうし、プロには厳しい批判、アマや初心者には温い励ましの言葉にもなろうというもの。

だがこと川柳の場合はどうなのか。我々は趣味として楽しんでいるのだからただ作って発表して貰えばいい、と許りも云って居られまい。選者が設けられる所以でもある。そして選評眼が求められその人格・識見まで云々されることになる。

さてその選評眼であるが、水準・焦点をどこに据えるか人によってまちまち——。文法や語句をやかましく云うもの、その発想・意向を論ずるもの、中には自分の言いたい事を言ってくれた同感であると一も二もなく惚れこんでしまうもの。そして短歌などでも云えることだが、ただその作品の意味をなぞっている場合がある。これでは単なる鑑賞に過ぎない。それより作品をどの様に受けとめ何を感じたかを第三者は聞きたいのである。

これらの事は作者についても同じことが云える。五七五の形態をとってはいるが事象の説明をしただけのもの、今迄に何度も見たり聞いたりした類型的な言葉を並べたもの、また肉親の情、不幸な事柄などの素材にいち早く同情し、奇抜な表現、新語にはすぐ引かれてしまう。自分も知らず知らずにそんな句を沢山作ってきている。つまり標準的常識的で平凡なものができ上がる訳で、結局誰もが同じことを考えるのだなと共感を呼ぶことになる。だがそれはやはり危険な部類に入りはしないだろうか。

その人でなければ見えない、聞こえない、言えない、訴えられないものがある筈なのだが。

ミニからマキシへロングスカートへ、人が

穿くから私もGパンをと、誰ものパターンが定まってしまう。そこにマンネリズムが生まれ、人間の心を渇かすのである。

川柳を作る人も読む人もこのところをよくよく心掛けて、常に瑞々しい気持を失いたくないと思う。

値上げブーム

永宗宗義

ある句会の帰りに、

A「今日の句会はどうだった？」

B「全没だよ」

C「私は三句抜けた、だが会費倍増は痛い」

A「ぼくんとこは年六百円が千円になった」

B「まだましだよ、私の方は同人費が三千六百円も上がり年額一万二千円になったよ」

E「しかし一誌だけならまだよいが、ぼくなど六つの会にはいっているので大変だよ」

C「で、どれくらい柳誌に払うの？」

E「投句料も値上げで年間二万円は越えるだろうな、その上、郵便料値上げもあるし、もうお手上げだよ」

A「私なんか、もうついて行けないな」

E「まったくだ、今年あたりなんとか整理しなければと思っている」

D「どうだ、久しぶりだから、どこかで一杯やっか」

ということでチョイ一杯になったが、これらの人々は、まあこれで結構楽しんでいるけれど、もう貧乏人は川柳が出来ないとこにまで追われているようである。

「川柳とは高くつくんだな」と印象を与え、新人を紹介するにも気がひけるようになったことは事実である。かといって柳社にそっぽを向ければ社がつぶれるだろうし複雑な気持ちにならざるを得なくなった。

無収入の老人が余生を楽しむには川柳の荷は重くなってきたようである。

—これはこれはと老人腰を伸し　宗　義

川柳年鑑（75年版）

東野大八氏は「川柳における笑いの系譜」を堂々10ページに執筆。著名柳人自選句へ本社関係。

橘高薫風氏は

田中を刺し中曽根を刺す標本名黄金虫
竜宮へヘドロ藻泥となりぬべし
牛頭馬頭の雲は動かず原爆忌
禊する蓮花の菓子を口にして
恋をして四十九日となりけるよ

山内静水氏は

あら聞えましてと妻にとぼけられ
さんづけで呼ばれ私は何んでも屋
一糸まとわずマネキンだった
手をそえてくれた男の馬鹿力
サヨナラへ自動扉は嗚呼無情

公募作品入選句

「人　生」

—選者　鈴木勝忠（岐阜大学教授）岸田万彩郎（番傘）大田黒花簿（現代川柳研究会）

応募数一一四七句から一三一句入選、そのうち川柳塔関係入選句。

寝ころべば宿題の子も来てころび　市場没食子
靴はいているのに話むし返し　宮川　珠笑
爪楊枝妥協する気を見せはじめ　菊田いさむ
看護婦に小児科の顔外科の顔　森田カズエ
朝めしがうまい倖せ抱いて出る　佐々木静泉
たまに逢う恋は指先きまで喋べり　野坂つき子
たぐっても数珠に終りのない悟り　神谷凡九郎
ハシダだけ飲む気がハシタだけ残り　工藤　甲吉
気のつかぬお人だ孫をまだ褒めず　稲田豊作
憎まれる顔にも使い道があり　長野　文庫
さからえば母の白髪が目立つなり　久米奈良子
十二月某日美術館に居る　北川　春巣
油断した顔は羊になめられる　香川　酔々
哀歓の歴史の褪せた鏡かけ　月原　宵明
パンを食う男の寒い朝　大路　美幸
吉日をたしかめ老母の裁ちバサミ　石垣花子
比類なき名曲として除夜の鐘　若本多久志
家族写真一番小さい母うれし　吉川　米子
水加減教えて妻の里帰り　弘津　柳慶

鈴木勝忠氏評から川柳塔関係分は森田カズ

エ氏作へ「伝統の確かさに、するどい眼を備えた作といえよう」

大田黒花箒氏評から本社関係分は北川春巣氏作へ「軽味と空間のつながりによりイメージを広げてくれる」

「社　会」

―選者　浜田義一郎（大妻女子大学教授）藤島茶六（川柳人協会）西村九千坊（現代川柳研究会）応募数五〇六句から一一一句入選。

落ち葉にも居心地のよい隅があり　若林草右
起立するだけの議員が最高点　西口　漁人
大衆の声と称するひとにぎり　増田　次章
何処へ行くつもり電車へ乗った蠅　山本立児
臍に落ちぬ数字ソロバンでも同じ　飯田悦郎
来年をどうする昨日今日の記事　中村九呂平
タバコより恐い空気を吸うている　西田薄子
伝説を読まねばただの土産物　草深　酔升
貸しのある得意が移転すると聞き　浜田儀一
北枕させた姿の日本地図　不二田一三夫

「自　然」

―選者　宮田正信（滋賀大学教授）鈴木九葉（ふあうすと）佐々木福郎（現代川柳研究会）応募句三〇一句から七二句入選、本社関係は一粒の種太陽は見逃がさず　本田恵二朗
大仏も鹿も墨絵の町で寝る　高杉　鬼遊
ほどほどの濁りがあって魚が住め　吉田圭井堂
曲るとこまがって蟻の列続く　小林由多香
宝石がなんだ僕には星がある　大路　美幸
大輪を咲かせ隣人よろこばせ　土岐トク子

宮田正信氏評から本社関係は本田恵二朗氏作へ「技巧の秀れた作品、表現に一分の隙もないが、作品を読みかえしているうちに、人間的な隙が少しは見えてくるのではないと、うまいだけのものになりやすい」

現代川御に託する可能性　片柳　哲郎

進む時計遅れる時計夫婦かな　橘高　薫風
〔評〕心はやる良人、蹤いてゆこうとしても遅れてしまう妻、そしてある一日この二つの時計は0時に合わせるのである。再び走り出す良人、蹤いてゆく妻……。心うつ描写。（不）

〒102東京都千代田区富士見二の六の九雄山閣営業部―A5上製一八〇〇円〒二百円

（現代川柳と川柳の三要素について論究し川柳創作におけるその必要性と今日的意義を考察する特集ほか全川柳人必読の書）

読売新聞から

（50・1・18）

川柳塔（五七一号）吉野冨江の

「敬老日などと老人意識させ」

「インフレの波に流れたマイホーム」は風刺の効いた秀句だ。物価高をうたった句が多い。その中で、

「値上りの不満もつめた市場籠――井上マサ子」

「物価高船乗りのように舵まかせ――福田陽山」

「物価高ふれず観月会終る――三井酔夢」が光っている。

「歯科医院番号札であつかわれ―江原良二」

「爆弾を持っていそうな目と出会い―福田丁路」にはまざまざと世相が映し出されている。（正）

☆

「ネジ」の選をして　**西出　一栄**

ネジという殺風景な題の上に、久しく選をしていないので、内心案じておりました。

雅号を抜いて一句ずつ句箋に書きうつしましたところ、同想の句が多く、ことに奥さんのネジがたくさん目立ちました。

私の家はいろいろなネジを製作している関係上、大変たのしく、おもしろく拝見しましたが、心にもネジの必要さをつくづく感じさせられました。佳句ぞろいのため軸吟が出ないほどでした。

転居通知

大阪の　春の
山並み　一人占め
与呂志

〒583　大阪府藤井寺市北条町四番三十八号
児島与呂志
TEL　〇七二九・五三・七四二四

勧誘

藤村メ女選

勧誘に負けて一口乗つてやり　里風
手相がよう当る勧誘員だつた　可住
勧誘に恩師の名刺そえてあり　道子
勧誘の尻をグラフに叩かれる　一風
勧誘にチラと色気も覗かせる　松花
勧誘に来て仲人の口もきき　一郎
恩師今日生命保険を勧めに来　七面山
セールスの勧誘断る覗き窓　章雅
勧誘へ断わり切れぬ顔が来る　千代
勧誘の美女へうっかりウンと云い　度
勧誘に来た人とうに辞めていた　本蔭棒
生きるためです勧誘くたびれず　古方
勧誘を断る勇気妻が持ち　陽子
御近所の火事へ保険屋勧めに来　暁風
旧師では否とは云えぬ肚を決め　紫宏
勧誘という副業の靴がちびり　千翁
勧誘と見せぬじまいではいらされ　可住
勧誘に来て養子にと望まれる　伶人
勧誘は猛犬居りをものとせず　どんたく
人柄について勧誘へのりかかり　紘
生活のかかった勧誘歩巾伸び　与史
勧誘の成績ここらでやめさされ　隆子
体験のすすめる呼吸へ出る熱意　武雄
勧誘をされて始めた趣味に生き　豊生
妻の口外交員に負けていず　敏
勧誘へ今一息の月を踏み　奇童
予備校の勧誘試験の門で待ち　踏草
勧誘員足で稼いだ棒グラフ　悠泉
新興の神や仏がまといつき　静枝
勧誘に押しの一手が邪魔をする　代仕男
勧誘を生活の糧に寡婦の足　好一
勧誘の保険会社の規模で決め　茶人
土地売った噂へ貯金勧めに来　洋々
締切りが間近勧誘食い下がり　洋々
無駄足に負けず勧誘今日も又　祥月
信心をしろと病弱勧められ　英詩
勧誘に廻る恩師でうとまれる　肖二
セールスの世辞へ無口な花鋏　昌道
勧誘員同窓名簿繰ってくる　登美也
免許取立で保険屋が座り込み　明春
勧誘を上手に帰えす秘書の腕　春日
断われぬ筋へ勧誘手を廻わし　素身郎
佳
一回で掛け捨にする義理を立て　みのる
花の香に勧誘される遠廻り　白水
勧誘の師を追い抜いている詩吟　白水
吠えられた犬をほめてる勧誘員　思月
勧誘を避けて疎遠となる恩師　宵明
人
勧誘の鼓動うれしく春の曲　白水
地
勧誘はこんな裏まで探し当て　木魚
天
友情のきずな勧誘から縺れ　福水
軸
おっとりとかまえて勧誘ぬからない

ネジ

西出一栄選

ネジ釘も上手に締める母子家庭　一郎
エプロンに小さいネジも拾われる　木魚
母の訃にさすがの父もネジゆるみ　紫宏
ネジ釘に素人やなとみくびられ　可住
鳩時計まもなく止まる音で鳴き　カズエ

川柳塔松江支部
隠岐合同吟行句会

五月一日
大阪駅発（二二・〇四分寝台車）五月二日
米子駅着（七・三四分）――浦郷へ渡り―
国賀観光――浦郷にて泊
五月三日浦郷―別府―菱浦―西郷にて泊
五月四日西郷――白鳥観光――七類――
松江―大山三号　二一・五五分発寝台車―
大阪着　五月五日　六・三九分着
定員　二十四名　会費三万円也
（申込所　〒584富田林北大伴二〇八
電07212（4）6525・坂尾岳人）

児の機嫌つなぐ玩具のネジを巻く　代仕男
一日のネジをゆるめるコップ酒　秋月
ケチケチのネジゆるめさすひとに会い　豊生
ネジを巻かれてまた十八番の佐渡おけさ　七面山
締らへん筈やこのネジ左ネジ　潮花
買わすまでもう一息のネジを巻く　貞祐
ネジ巻いてやるとコーチが発破かけ　英詩
夫婦してやっと開いた瓶の蓋　古方
ネジ一本もどしてしめて技術料　不二
スムースな経営ネジはよく締り　道子
国鉄の心のネジがまた緩み　みのる
正月の惰性へネジを巻き直し　好一
ゆるんでたネジに冷汗が出る検車　本蔭棒
ネジあれば巻いてあげたい様な人　右近
妹にネジ巻かれてる兄の恋　好一
人生の黄昏ネジがみなゆるみ　思月
ネジ一つ重い使命を背負わされ　一風
酔い覚めの水無意識に廻すネジ　魚山
待ちかねてネジ巻きにくる実家の母　香珠夫
下積みに祟拝されるネジ加減　白水
締められる定めにネジは生きている　紘
他山の石で心のネジを締めなおし　秋月
贅沢な世相へ石油ネジを巻き　伶人
家中のネジ締め直し世に挑む　豊生
ネジ巻いて出したに素手で帰って来　隆子
計画の構図へ夫婦ネジを巻く　福水
妥協せぬからネジ釘の無表情　千翁
二度目にはネジを巻かれて来た斗志　本蔭棒

佳

ネジ一つとんで動かぬ大世帯　落猿
遊び好きの夫のネジは子に巻かせ　綾女
新入社ネジ一本となる運命　どんたく
ネジが俺ならさしずめ妻はネジまわし　度
憤懣をひねればネジもヘソ曲げる　太茂津

人

僕のネジまくネジ穴が見当らず　凡九郎

地

締められて螺子のドラマは始まれり　太茂津

天

この幸を続けるネジを強く巻く　肖二

帯

高橋操子選

新柄の帯ウインドからこびる　里風
帯芯の固さに耐えている見合　伊津志
出来あがる帯へ父の眼定まらず　可住
帯締めた姿子供はもう女　一風
御主人に持たせて結ぶ太鼓帯　松花
出張の旅費では買えぬ博多帯　国彦
実家から母が使いの岩田帯　一郎
全通の帯を急ぎの用に締め　バット
帯締めた和服の妻が若返り　季賛
黒帯と知らずチンピラ文句つけ　魚山
角帯の良さゆったりと三カ日　章雅
みな出してまだ決らない帯の色　太茂津
辞退するその手でチップ帯に入れ　香珠夫
黄道吉日雌蝶の帯に鈴が鳴る　春日
帯解いて妻は茶漬で食べ直し　利美
むぞうさに結んで男の帯である　凡九郎
よちよちと帯を背負つた七五三　陽子
地味を着て帯で若さを取り返し　無人
舞い初めの帯へはさんだ舞い扇　潮花
嫁ぐ娘の胸のふるえをしめる帯　木魚
大阪を締め角帯の心意気　千翁
帯締めて夜の蝶夜へ身構える　どんたく
縄帯の初心忘れぬ今日の位置　白水
岩田帯それから姑の目がなごみ　重人
肥満体つなぎ合せる宿の帯　明春
帯締める手ぎわ明治はまだ達者　武雄
京に来てだらりの帯を追うカメラ　右近
着附教室やっと結べた太鼓帯　悠泉
文化帯だけは結べる娘の自慢　カズエ
兵古帯をしめて心にあるゆとり　祥月
付け帯も荷に入れておく親心　綾女

佳

貧しさは言うまい産む気の帯を締め　洋々
かくれても床し羽織の陰の帯　みのる
配色へ助言をたのむ今日の帯　古方
三代目女系の帯にある威厳　与史
マネキンの帯はお客に背を向け　露子

人

娘に締める帯のたのしみ母のもの　静枝

地

家元を継ぐ角帯に隙がなし　宵明

天

美しく老いて結城を締める帯　福水

軸

帯つけた姿に惜しい足さばき

初歩教室

題 —「浮」—

本田恵二朗

暫く経ては獲物と共に海女が浮き　誓　二
見たままをそのまま説明をした。海女が海にもぐる目的は言わずと知れたことである。浮き上った時は大なり小なり目的を達しているはずである。それを説明ではなくて描写することを考え抜かねばならぬのが作家の宿命である。その宿命は苦しそうで楽しいことである。だから大いに苦しみ、大いに楽しまねばならない。私なら次の如くやってみるが百%の満足感を味えないのが残念である。

（海女やおら凱歌を挙げて浮き上り）

窓から見ればのんきそうなアドバルン　同
前句同様に説明しただけで、なんの感慨も湧いてこない。こんな時、アドバルンをあたかも人間さまのように扱ってみることだ。即ち擬人法を活用するとよい。

（窓越しに浮くアドバルンが欠伸する）

病葉の水面に浮ぶ安らぎよ　翁　童
（わくら葉を浮べて水面無表情）

果てしなき浮草道をたどりゆく　同
（浮草のあわれ流れにさからわず）

身の浮沈世間体など次の次　露　杖
（浮沈しきり世間体など言うとれず）

浮草の花さざ波に媚びる色　同
（浮草の花さざ波に嘯かれ）

水蓮が蛙の恋を載せて浮く　同　重　人
心浮く一つの趣味に余生活き　静　江
（趣味一つ余生を浮きうきさせてくれ）

浮き沈みしつつやっとの六十路　サ　ヨ
（人生航路浮きつ沈みつ六十年）

船がくる浮桟橋がゆれてくる　度
（大漁旗浮桟橋をどよめかせ）

どん底で聞けば浮世の裸声　凡九郎
（どん底の声は浮世の裸声）

浮雲の声聞きとうてゴロリ寝る　同
（浮雲としばし語ろう草に寝る）

浮草の不満は土の香を知らず　宗　義
浮き上る自信がなくて飛び込めず　同
浮ぶ瀬を信じて流れに身をすてる　同
（浮ぶ瀬もあろう流れにさからわず）

未亡人浮いた噂にしばられる　紫　宏
（未亡人を浮いた噂が追いかける）

なんとなく浮雲のよう旅したく　春　子
（浮雲のような旅などしてみたく）

人の世は浮きつ沈みつ根なし草　つ　た
浮草に色さまざまの池の鯉　同
（浮草へなにか囁く池の鯉）

名案が浮ばぬうちに詰め寄られ　大　成
零細の浮沈へ家族も高齢化　同
（浮き沈む幾とせ一家老化させ）

沈んだ顔浮いた話を受付けず　頼　次
（浮かぬ顔浮いた話に乗ってこず）

浮雲に失意の心なぐさまれ　比呂路
（浮雲に失意の傷をいたわられ）

禅堂の静けさ妄想浮き沈み　紘
（凡人の座禅へ妄想浮き沈む）

忙中閑浮木をみつめて憂き忘れ　重　人
（忙中閑浮木ピクピクとよく動き）

憂さ忘れ—まで言わなくても、浮木がよく動いてくれたら大公望の心境は天下泰平だよ。

社の浮沈中小企業にひしひしと　保　夫
（中小企業不況の波に浮き沈み）

旅日記開いて旅路の名所浮き　篤　史
（旅日記開けばさやかに浮く名所）

夕暮にくっきり浮いた天守閣　同
（去る陽が天守を影絵にして浮かせ）

浮くどころか横這いさえこの不況　静　子
（浮力失せ不況の波に呑み込まれ）

浮く虫は水の深さも知らず生き　藤　持
（水すまし水の深さを知らず浮き）

浮きうきとしたハミングで娘が戻り　茂　美
（ハミングで浮きうき戻る娘にあきれ）

アブク一つ春はまだかと浮く金魚　同
（泡吹いて吹いて金魚が春を呼ぶ）

浮草は主役になれず陰の草　正　則
（浮草は主役になれぬまま流れ）

浮き貸しに無理な計理で穴をあけ　喜　洸
（浮き貸しの無理が大きな穴となり）

様々の来しかた浮ぶしまい風呂　喜代子
（あれこれとこしかた浮ぶしまい風呂）

浮かれてる子の口笛へ母黙り　同
寿命だけがのびて浮世は暮しにくい　ますえ

（寿命ばかりのびて浮世はせちがらい）
浮御堂も琵琶湖を飾る役を持ち　同
（浮御堂アクセサリーのように浮き）
川に落ち浮きつ沈みつ流れゆく　秀村
（浮ぶ瀬のないどぶ川を流れゆく）
水の面に浮ぶ水鳥足せわし　つね
（白鳥の足のせわしさ見せず浮く）
浮き沈みあって人生また楽し　生仏
（浮き沈みあって人生面白し）
地を這った霧がお山を浮かばせる　無人
（海に化けた霧にお山が浮いている）
運命のいたずらもあるのが浮世　静泉
自己主張の果て仲間から浮き上り　同
浮動票笑顔と握手に攻められる　同
浮腰を突いた逆転ホームラン　伊津志
浮上した姿勢蛙の天下取り　同
（天下取ったような顔で蛙浮き上り）
浮きうきと開いてがっくり断り状　陽山
思うようにならぬ浮世で面白し　瓢太
浮き沈み世話した奴の世話になり　同　慶彦
浮世絵の美女は通用せぬ昭和　同　繁子
子の土産浮かすパチンコつきが逃げ　同　三十四
浮き沈みしたその過去がなつかしい　同　利美
浮き沈みして定年の岸につき　同　本蔭棒
屍に鞭それじゃ仏も浮かばれず　同
宙に浮く辞表責任誰れがとる　同　貞祐
浮草が場末のバーで根をおろし　同
こうなれば頼むしかない浮動票　本田恵二朗
三度買い三度家売る浮き沈み　貞祐
浮名立て職場の花が読む誓詞　同
閑居して憶う五十余年の浮き沈み　同
首に紐つけて浮気もさせている　満津子
ほほ笑みを浮べるこころ計りかね　同
浮気ではないから余計許せない　道子
浮草の過去かくせない言葉尻　同
せちからい浮世を云いつつ長寿法　繁子
浮気さえせねば申し分ないお方　同
—亡妻七回忌—
忌を修す浮々と流れる鰯雲　静観堂

題—引—三月二十日締切（五月号発表）
宛先　倉敷市下津井一—九—三四〒七一一
本田恵二朗

川柳塔社常任理事会

（一月二十一日（火）道頓堀播重に於いて）
午後六時から開かれた「おめでとう会」の出席者は、生々庵、多久志、栞、好郎、古方、小松園、いわを、文秋、静馬、形水、百酒、柳宏子、薫風（敬称略）の十三名。
議題はなく飲んで食って散会という新春気分の理事会であった。（薫）

例年の「おめでとう会」は大阪周辺の参事が常任理事会に合流することになっていたが本年度は右のようになった。なお新編集部員も参加したかったが連絡がとれなかったことをおわびします。（不）

（二月四日（火）午後五時から本社に於いて）出席者は、多久志、薫風、百酒、小松園、一三夫（敬称略）
多久志氏から12月、1月の会計報告があって、社の運営方法などを議題に盛り沢山の内容だった。
摩天郎氏のご尽力で、本社句会は三月七日の句会からホームグランドの以和貴荘へ帰えることになった。
薫風氏が四月号から「愛染帳」の選のため「秀句鑑賞（水煙抄）」の執筆を新鋭作家中心に、地方の方々にも随時ご執筆ねがうことになった。（新鋭作家起用は栞氏がずっと以前から提唱されていたものである）（不）

—編集会議（二月七日）
本号の座談会に薫風氏ほか編集部員の活躍を説明、こんごの雄飛を誓い合った。一部既報の水煙抄「秀句鑑賞」の執筆へ妍を競ってもらうこと。また五月号はこどもの月なのでこれにも執筆するなどファイト、ファイトの連続である。さすがに編集部員、アタマの回転が早く、議題はトントンとはこぶ。
出席は薫風、天笑、素郎、鬼遊、酔々、岳人、一三夫（敬称略）

河野春三編集
「風」　季刊5　二月発行
斬新の編集！最高のページ！
〒564　高槻市竹の内町二二の一
河野方　風発行所

第二百八十四回（五十年度第二回）

大萬川柳

「タイミング」入選発表

選者　川村好郎
投句総数　五百八十句
入選　六十句

お茶一つ出すにもあったタイミング　大阪　柳宏子
ドラマならここで助けの舟がくる　富田林　維久子
タイミング計るカメラの手が重い　大阪　十止庵
いまわの際虫が知らせたタイミング　堺　ひろ子
笑わせる間の一つにも光る芸　堺　一二三
すっと出すライターにもあるタイミング　藤井寺　吸江
妥協するつもりで待ってるタイミング　和歌山　冨江
すっとぼけ振りもご立派タイミング　大阪　凡九郎
タイミングに乗じ押し切るセールスマン　東大阪　美子
人生にタイミングというユーモラス　大阪　凡子
立見から歌舞伎へぞめくタイミング　神戸　どんたく
タイミングよくエリートの波に乗り　岡山　陽子
税務署が来て借金取りが去に　八戸　昭治
年金が失険が切れたとこへくる　松江　登美也
酒の座を借りて切り出すタイミング　笠岡　白梅子
暖い助言になったタイミング　神戸　静泉
買いそうなムードセールス見逃さず　東予　悠泉
タイミングよすぎて工作かと思い　大阪　一栄
タイミング時の氏神誤まず　松原　万竿
好意もつ視線が合うたタイミング　守口　甑太
タイミングあとは二人にまかしとき　和歌山　与史
タイミング逃がして笑えない喜劇　堺　天笑
討論に負けそうになり時間切れ　大阪　満津子
タイミングはずす女の笑い声　高槻　潮花
食事時狙ったような客が来る　八尾　主税
タイミング嬉しくつづく里帰り　倉敷　白水
タイミング悪いと財布開けてみせ　橋本　木魚
一呼吸して人生の波を待つ　米子　千代
口説くにもソフトムードとタイミング　大阪　徳松
よいとこへ来たとふところ当てにされ　尾崎　利美
タイミング裏目裏目の日の焦り　大阪　好一
タイミング合わせて登る夫婦坂　大阪　小松園
汐時を心得ている腰を上げ　貝塚　つき子
本筋に戻す話のタイミング　大阪　小松園
敏感な女が盗むタイミング　松原　サヨ
せっかちな夫へ合わすタイミング　名古屋　曲ん手
風むきが変るタイミング待っている　富田林　花梢
タイミングよかった出合いにしびれてる　八尾　弥生
愛人という演出のタイミング　大阪　柳信
偶然を合わす司会のタイミング　今治　昌道
元朝へタイミングのよい福寿草　大阪　満津子
オイと云えばハイと差出す妻が居て　大阪　金三
タイミング外した笑いに座が白け　岡山　翁童
タイミングの良さゴマスリと気付かない　松原　サヨ
タイミングよろしく今日も共稼ぎ　松原　サヨ
道草をさせぬ女房のタイミング　大阪　柳志
汐時を逃がして無心云いそびれ　大阪　柳志
赤ちゃんのええ顔を撮る手間がとれ　大阪　柳志
タイミング合わず大物釣り落し　名古屋　曲ん手
司会者としてタイミングを心得る　大阪　金三
珍客へ自慢の松に月かかり　大阪　柳信
小額のチップ効かせたタイミング　大阪　文秋
一押二押タイミングなど気にしない　大阪　あいき
タイミングねらいつづけている無心　大阪　柳信
椿にも惜しまれて散るタイミング　大洲　暁明
待っていたように出ていく終電車　富田林　花梢
男心じらすタイミングを外し　大阪　文秋
タイミング外さぬ秘書としてのメモ　富田林　維久子

人ノ句

タイミング夫婦に時刻表がない　兵庫　可住

地ノ句

牽制球夫へ投げるタイミング　和歌山　久子

天ノ句

再会の握手には無いタイミング　堺　一二三

選者吟

貸借の立場で逆なタイミング

昭和五十年度　ベストテン（一月現在）

一	一二三	七、〇	堺	一〇	維久子	三、五	八尾
二	静泉	五、〇	神戸	一一	白水	三、五	富田林
三	翁童	五、〇	岡山	一二	多久志	三、〇	倉敷
四	好一	五、〇	大阪	一三	あいき	三、〇	西宮
五	洋々	四、五	鳥取	一四	久子	三、〇	大阪
六	つき子	四、五	貝塚	一五	吸江	三、〇	和歌山
七	柳志	四、〇	大阪	一六	暁明	三、〇	藤井寺
八	可住	四、〇	兵庫	一七	花梢	二、五	大洲
九	美幸	一八	文秋	二、五	大阪	二、五	富田林

以下略

昭和五十年第四回

「時々」五句以内

締切　三月二十日

第五回

「裏」五句以内

締切　四月二十日

投句先

〒593 堺市堀上緑町一の三の七

藤井一二三方　大萬川柳係

おいそが氏

八木摩天郎氏の近況

――放送に新聞に――

四天王寺管長出口常順師に著書「心のふるさと」贈呈したところ大いによろこばれ、四十年前、同師がアムステルダムで着色の堺港のオランダ船の銅版画を入手された師の記事の紹介文を追想され、感銘を深くしたとのこと。

また摩天郎氏は善光寺鷹司敦子夫人へ夫君信敬氏が堺市在住当時の随筆記載の新聞を贈呈したところ、アルバムにはって多くの人々に見せ、よろこんでいるとの礼状を受けられた。二年前善光寺を案内した頃をしのび、善光寺方面への吟行を待ちますと追記されていた。

NHKテレビ国史探訪に堺市出身の「小西行長」を放映企画について、摩天郎氏宅へ資料取材に訪問したいと東京の取材班の依頼に応諾、キリシタン大名の事なので史料すくなく、取材のため三日間も案内、二月一日には全国放送となり、堺薬種商出身の小西行長は正に「商而将」の感を深くしたとのことだった。

清水白柳終えんの地、大阪府南河内郡美原町から同町のローカル紙「まちの友」に川柳選者の依頼をうけ、そのほか美原町付近の古跡、名勝地の紹介にも執筆するなど、目下「オイソガ氏」だそうである。

川柳家を夫に持てば

柳宏子夫人

西田恭子

とにかく忙しい人です。川柳だけでなく何でもやり出すと、とことんやるだけに、尺八、俳画、奇術、麻雀等々……

もっとも軀も丈夫で寝付いたこともなく毎日毎日早朝に出勤して夜遅くまで一体何に顔を出していることやら……余り家で川柳を作っている様子もなく一体何時作っているのかと思います。年賀状や暑中見舞を頂いて他の皆様方の面白い句や、たのしい句を拝見するにつけても、主人は一体どんな句を作っていることやら……たまに句会で抜けた句を聞きますが余りうまい川柳だとも見えません。……すみません。

でも達者で元気に日曜も飛び歩いて川柳や尺八も愉しんでいてくれればと思っています。

川柳家というような見方をしたこともありませんので余り川柳家としての夫を意識したこともありません……すみません。

どうぞ皆さん柳宏子サンをよろしくおねがい致します。

柳界展望

（原稿締切毎月末）

▼川柳塔社７５年度常任理事会おめでとう会は１月21日道頓堀播重で開催。

▼第22回大萬川柳大会は２月16日阿倍野区大萬で開催盛会。

▼第20回全国川柳作家年鑑公募。参加費一二〇〇円、原稿締切四月末日。参加用紙は〒６５３神戸市長田区五位ノ池町一の三の一ふあうすと川柳社へ。

▼柳都49年度柳都賞受賞作家を二月号に発表。同人賞は庄子喜一氏、会員賞は神田義和氏。

▼川柳きやり吟社創立５５周年記念句会は四月六日午前11時から「日本都市センター」千代田区平河町二の四の一で開催。題―招く・春・揃う・光る・積む・（三句）投句料百円。投句先東京都千代田区神田東紺屋町二七、川柳きやり吟社〒１０１。

▼川柳たましま二百号記念川柳句集「無限」が発行された。本社同人の豊作、里風、克枝、柳子、扇水、恵二朗、黎水・八笑人（元同人）諸氏も参加。

▼第12回北海道川柳大会は６月22日開催―題―白・真ン中・顔・新しい。投句料三百円〒０６８岩見市七条西一丁目浜中道子方。

▼石曽根民郎氏（しなの川柳社主宰）の川柳活動の近況を50年１月24日発行のアサヒグラフの「ふるさとに味あり」に紹介された。

▼榎田竹林氏（静岡川柳主幹）４９年１２月２３日急逝、享年七六歳。静岡川柳界最大の指導者だった。謹悼。なお同社の主宰は柳葉女未亡人が継がれることになった。

▼市川鱗魚氏（岐阜市）は老人福祉会で川柳の指導をされているが、講義は路郎先生から教えられたことをくりかえしていますと。

▼武玉川文芸社下村梵氏は「武玉川」の廃刊を宣言された。まことに残念である。

▼時の川柳社賞（49年度）は萩原順治氏に決定。発送の宛名書きや陽のあたらぬ場所で活躍された。

△同人の動向△

▼北川春巣副主幹から―食欲はあり、お酒も飲んでいますので一応ご安心ください―と。「聴診器」の好評をよろこんでおられる。

▼若本多久志氏（西宮市）は「けいさつの友」の〝川柳漫談〟のほか、「自動車販売ニュース」にも〝時事川柳のたわごと〟を自販坊のペネで執筆、共に好評。

▼尼緑之助氏（出雲市）は一月十六日ＮＨＫの木曜ファミリーに柴田午朗、佐竹君女氏らと出演された。

東洋樹川柳賞受賞者は「弓削川柳社」に決定

マスコミＮＯ・１の同社へおよろこび申しあげる。なお同賞贈呈川柳大会は**五月十一日正午から**明治生命ホールで開催される。

▼浜野奇童氏（岡山県）は一月一日の弓削新春句会風景をＮＨＫ海外放送に、八日にはＲＳＫテレビ「奥さん十時です〝川柳でおめでとう〟」に直原七面山氏らと出演。最近のマスコミは、川柳の入門手ほどきなどに力を入れてくれるのでありがたいですと。東洋樹川柳賞お祝い申しあげる。

▼本田恵二朗氏（倉敷市）のご長男（高知県立中央病院医長）が八年ぶりに帰岡。川崎医大助教授として栄転、津島に住家新築中だが令孫たちが近くに住むので大ハリキリ。また六月にはアメリカ訪問を予定されているので最良の年になりそうであると。

▼伊藤茶仏氏（小松市）は北国新聞へ「いしかわの柳人たち」を連載執筆。北国柳壇をあますことなく快筆にのせられている。

▼橘高薫風氏（豊中氏）は「俳句公論」二月号へ〝川柳と俳句の問題点〟を執筆。ますます川柳作家として磨きがかかる。

▼正本水客氏（大阪市）から―浜松の三男が昨年十一月結婚したので一月に行き、二月には紫香、潮花と土佐へ出掛けますと。

▼八木摩天郎氏（堺市）は堺の「愛市会報」創刊号へ路郎先生の句を引例して執筆。また堺市の書籍店主景井氏が年賀ハガキに摩天郎氏の句碑の句を印刷、未知の方を案内するとの友情を示めされた。また氏のご尽

力で本社句会のホームグランド「以和貴荘」へ三月句会から帰ることになった。なお氏の最近のマスコミに活躍するさまは目ざましいものがある。（本誌参照）

▼浜田久米雄氏（岡山市）は一月二十三日、新幹線の試乗で岡山―広島間を一往復された。ワンカップの封を切っているまの五十五分着は早いものですと。

▼小西無鬼氏（兵庫県）は一月二十九日本社訪問。その日福井野迷路氏を訪問歓談されたとか。なお遠山可住氏が近く栄転（農事指導普及の所長？）されるので〝ささやま〟の編集は越山、英断両氏らと続けていかれる。

▼板垣草丘氏（出雲市）から―いずもの新春句会には二十代の参加もあり平均年令は四十八歳でした。

▼森井菁居氏（竹原川柳会の四九年度の総合一位（三年連続）努力賞は槇田英詩氏。九州から―さすが湯の里は川辺を湯気が這い―菁居。

▼小砂白汀氏（島根県）はいずもの川柳賞を得られた「背信の積木は少しずつゆれる」が受賞作となった。

▼清水一保氏（鳥取県）は一月上旬「東伯川柳会」を創立、会長は一保氏。なお「川柳塔社鳥取県東伯支部」として活躍される。

▼山本素郎氏（堺市）はこのほど「川柳教室」仮称―を開設、新人の指導にあたられ、その第一号に先輩の句を特集。ご発展を祈る。

▼阪上十止庵氏（大阪市）は一月十一日に初孫を得られ、お爺ちゃんとは寂しいです。一三夫氏作新関西の日曜読切小説をたのしみにしています。

▼西尾栞副主幹は府警発行「なにわ」柳壇の選を彦乃先生に代って四月号から担当される。

▼多久志、小松園両氏から「湯の峯」吟行の寄せ書き拝受。

▼前号小泉戸牟氏の社名を「西日本新聞」と訂正。

▼山田季賛氏（高槻市）はスミ子夫人と小旅行をしたり元気はややとり戻したものの静養につとめておられる。岡山～博多間の新幹線にも試乗。

▼奈良県労働会館の（おめでとう川柳会）出席の笛生、カズエ、雀踊子、春巳諸氏から寄せ書拝受。

▼吉永川柳社新春並芳月還暦祝賀句会から寄せ書拝受。

▼不二田一三夫氏は雑誌「上方芸能」へ〝川柳寄席〟として毎号寄席の句を発表。〝川柳寄席〟とは将来発刊する句集のタイトル

3月の句会

5月号原稿は3月末日締切

菜の花句会	10日(月)6時	椅子・漫画・豆腐・止まる	投句百円美幸宛。八尾神社内西郷会館に会場が変更しました	二百円
堺若芽川柳会	13日(木)6時	髪・世間・絵・卒業	堺市九間町東2丁1―7（電堺29・6235）摩天郎宅。	
南海川柳会	20日(木)6時	社歌・淋しがり・雰囲気	南海電鉄本社食堂内。	
南大阪川柳会	20日(木)6時	学園・スナップ・弱者・ふくらむ	松崎町3丁目大萬。	
川柳東大阪	22日(土)6時	馴れ合い・好意・バッジ・情報	東大阪市中央公民館2F第2集会室。	

本社二月句会

会場　文化会館

七日　午後六時

来月からまた以和貴荘へ帰るので、きょうがここのサヨナラ会場となる。

多久志氏の柳話は、新聞記事に挑戦状をたたきつける時事解説。

排気ガス／トイレットペーパー／灯油／洗剤／原子力船むつ／第三の水俣病／男性ヌード／ETC。これらの真実はみな新聞によってゆがめられて報道されている。大衆の味方であるはずの新聞が大衆を裏切ったとして氏の舌鋒は火を吐いた。

今月の月間賞杯は好作家、阪上十止庵氏の両手にがっちり握られた。

（進行・西田柳宏子―記録・高杉鬼遊）

出席―たかし・牧人・多久志・川狂子・勝晴・正面子・一三夫・柳志・右近・与呂志・太茂津・滋雀・敏・文秋・鎮彦・喜風・悦郎・庸佑・誓二・千万子・維久子・儀一・花梢・三十四・形水・静馬・好一・栞・夕花・一舟・肖二・綾女・素郎・度・鬼遊・葛城・重人・水京・君子・智子・百酒・鶴声・正彰・十止庵・政次・一二三・頂留子・珠笑・瓢太・幸太郎・雀踊子・凡九郎・美幸・吸江・柳宏子・好郎・酔々・つき子・恒明・岳人・薫風・小松園・天笑（一月も出席）葉子。

席題「長　身」　香川　酔々選

長身が長身の不便さ知っている　悦郎
長身の横でぬれてる相合傘　夕花
長身の姉を残して先に嫁き　柳志
長身に囲まれ満員車であがく　珠笑
どっちに似ても長身見込み薄　恒明
長身をクジ買う列でひやかされ　勝晴
長身へ五尺の闘志が負けていず　岳人
ふり向けばふり向かれていたノッポ　雀踊子
痩せてはるから長身が折れそうで　凡九郎
平和とは児の長身に気を揉ませ　喜風
長身の背がまだ頼りない片えくぼ　与呂志
長身を90度にして低姿勢　幸太郎
長身は入学式で覚えられ　たかし
長身とだけ犯人は記憶され　滋雀
長身の靴にヘソクリなどはない　美幸
長身にふさわしくない妻腕を組む　十止庵
葬式に長身もっとも寒くいる　鬼遊
長身も勝手に伸びたわけでなし　太茂津
長身は笑いながらに取ってくれ　正面子
長身の父の背すじにある青春　夕花
長身の兄へそくりは下におく　千万子
長身へ長身なりの用が来る　庸佑
長身を曲げて左遷の荷をまとめ　酔々

席題「本　格」　山本　素郎選

本格にやると道具を買うただけ　珠笑
はっきりと嘘を見通す本格派　与呂志
本格に使った金の無駄をする　花梢
本格の唄どこか違うた節回し　吸江
本格の道を歩いて貯金せず　美幸
本格にやらずコツだけ知りたがり　文秋
どん底も知り人生の本格派　酔々
本格と言うお料理は待たされる　水京
本格の小節のとこで聞かせる気　小松園
前衛へさすが本格揺がない　太茂津
祖母なき後は本格的でない行事　君子
本格のそこに言えない味がある　肖二
本格にやってもらって高くつき　右近
伝統にカビが生えてる本格派　多久志
本格になって揃える釣道具　失名
本格のポルノ見てきた帰日談　一三夫
本格に習うたら読めん文字を書き　一舟
凝り性がそろそろ本格的になり　柳宏子
じりじりとおされはじめた本格派　庸佑
本格を見て略式にすると決め　千万子
本格の上に別格が居てはった　凡九郎
略式へ一と言はさむ本格派　百酒
民謡を正調で聞く旅の酒　牧人
融通の効かぬ本格派で通し　恒明
本格になれば鉢巻しとうなり　正彰
本格的に不況家計簿つけ出した　鎮彦
本格派だから正座が崩せない　百酒
本格派しずかに道を遠ざかる　素郎

席題「母　子」　笠原　吸江選

遺影には恥じぬ暮らしの母子家庭　葛城
母と子の対話世代のずれ歎く　喜風
母と子の仲がこじれた良い縁談　一二三

子の宿題そろそろ母の手におえず　静馬
母子だけ未来を作る夢に生き　たかし
一人子へ話せる母に成ってやり　柳志
母子家庭砂場に父の影写る　岳人
母と子の歴史がはじまる母子手帳　雀踊子
肩寄せて母子が生きるミシン踏む　牧人
ドキュメント福祉が泣いてる母子家庭　一三夫
母子手帳苦難は私だけにする　凡九郎
角かくし遺影に母も貝となる　維久子
入園日母子仲よく返事をし　三十四
ねんねこに母子ぬくまる子守歌　静馬
母子家庭声なき亡夫に励まされ　百酒
母のいろ子のいろ選ぶ春の市　夕花
母鳩が必死に守る蛇が来る　美幸
母と子の対話に入る隙がない　滋雀
母の影子の影乳母車が唄う　花梢
胎動の強さ絆となる母子　つき子
五線譜に休止符がない母子家庭　鬼遊
母と子の対話へ亡父は生きており　百酒
母子寮に月が見ている子守唄　滋雀
喜びの歩巾は母に子が合わせ　与呂志
ロッカーの鍵が母子の縁を切り　柳志
負けた子を叱って母も泣いている　珠笑
ご免ネの一言母子垣がとれ　花梢
子のセコハンで母のモードをつぎ合わせ　君子
表札は亡父のままで母子家庭　文秋
やせた背を流す母子のしまい風呂　維久子
又亡父の話午前二時を聞き　多久志
母子寮の窓へ氷雨が斜に降り　小松園
母子寮の隅で不屈の芽が育ち　柳宏子
暗い部屋賞状光る母子家庭　右近
母ひとり子ひとり灯りまろやかに　一三夫
母と子の対話が楽しい影法師　雀踊子
母と子の絆へ指と爪が似る　吸江

兼題「焦点」　村田瓢太選

焦点を金に絞って女生き　どんたく
大物に波及焦点ボケて来る　弘生
混浴の焦点ぼかす憎い湯気　章雅
焦点を狭め誤解の謎が解け　茶人
焦点を物価にしぼり幕があき　登美也
焦点を突こうとすれば話題替え　文秋
ピンボケに撮られて彼女おかんむり　多久志
スパルタと過保護で焦点定まらず　静馬
マスコミが焦点あわす時の人　好一
焦点を合わす努力が報われず　庸佑
言うだけは言わし焦点突いてくる　吸江
焦点をぼやかし酒にしてしまい　吸江
焦点に触れない間に電話切れ　吸江
焦点をしぼれば奇麗な嘘だった　滋雀
それとなく話焦点から外らし　幸太郎
焦点を絞ればお金のことになり　智子
焦点を合わす話がじれったく　庸佑
焦点はぼけたまんまで話合い　柳宏子
焦点が合うてプスプス燃える恋　幸太郎
責める眼が痛い焦点突いてくる　文秋
焦点を合せば映倫に引っかかり　小松園
酔っている証拠焦点狙ってる　水京
焦点をぼかしてポルノ儲けてる　多久志
女ひとり生きて焦点意識する　君子
老練な談話は焦点伏せたまま　頂留子
惚れてる目見つめられてる目を避ける　与呂志
焦点の中にしばらく馬鹿になる　維久子
政治家のやりとり焦点合わぬまま　綾女
焦点へ来るとまあ飲みなはれ飲みなはれ　静馬
焦点にされて祖国に住みつけず　一舟
焦点をぼかし答弁逃げ切る気　瓢太

兼題「恵方」　岩本雀踊子選

一年の厄を恵方で撒いてくる　曲ん手
それぞれに違う恵方を持つ私鉄　宗義
子宝へ恵方詣の絵馬を吊り　踏草
神社なら毎年恵方におわします　柳信
カーブーム恵方へつづく線を引く　祥月
恵方詣りスリに用心して歩き　一栄
恵方へと移転したけど倒産し　トメ子
恵方など言わない祖母でつつがなし　あいき
ふたありにとってどっちでもよい恵方　庸佑
父母います故郷を恵方としてくらし　静馬
初仕事スリも稼ぎ場撰る恵方　一二三
ただ祈る心へ恵方気にしてず　凡九郎
嘘つきの恵方に明日を祈る母　美幸
なんとなく有難い気もする恵方なり　恒明
春を呼ぶ恵方だろうか転宅地　与呂志
おもわくが恵方に向かう軽い足　維久子
なりゆきに委す恵方は信じてず　太茂津
どれも皆恵方と書いた初詣　柳宏子
おごそかな恵方の神も派手が好き　悦郎
正恵方予算の枠が小さすぎ　重人
なにごともないから恵方気にもせず　恒明
小野田さんの恵方はブラジルかも知れぬ　美幸
恵方から髪の奇麗な妓が戻り　勝晴
二人にはどっち向いても恵方なり　吸江

東西南北どの私鉄にもある恵方　柳志

境内の鳩も恵方の春らしく　滋雀

裏目にだって出ることがある恵方　恒明

職安に恵方の地図が置いてない　鬼遊

少しぐらいズレても恵方にする私鉄　静馬

幸運を授かる恵方へ初詣　庸佑

倖せは恵方に向きをかえてから　維久子

恵方のウソつき財布スラれたり　一三夫

生きている証し恵方詣する　酔々

初詣でみんな恵方にする私鉄　重人

嘘の無い恵方へ手さぐりで生きる　鎮彦

恵方も会社からは鬼門なり　雀踊子

兼題「パズル」　本多　柳志選

クロスワード鍵にも裏の裏があり　文

ハシゴ酒パズルみたいな街を行く　敏

パズルめく言葉の端が気にかかり　好一

新卒は人生パズルに挑戦す　たかし

立ち読みの知恵も仕込んで書くパズル　一二三

乗り越した駅でヒントを得たパズル　一二三

現代の世相パズルに折りこまれ　登美也

賞品につられたパズル夜が更ける　恒明

半分は他人の知恵でとくパズル　柳宏子

夫婦老いていつしか解けてゆくパズル　智子

奇声から先に解けてた子のパズル　太茂津

パズル解く父は子供の顔となり　どんたく

不可解な女ごころはパズルめき　一三夫

喜怒哀楽に女の泪はパズルめく　君子

パズル解く鍵を女にあずけられ　滋雀

解けそうなパズル夫婦の倦怠期　太茂津

父の遺書謎の言葉につき当り　多久志

思春期の胸をパズルで母に告げ　多久志

友情をパズルへのせて見届ける　悦郎

商品名入れたらパズルさっと解け　一舟

人生のパズル正解知らされず　綾女

ノーシンをのんでもパズルまだ解けず　一三夫

お見合を嫌う息子にあるパズル　あいき

週刊誌のパズルで主婦は暇を埋め　章雅

商魂も入れてパズルの如才なし　喜風

てのひらに描いたパズルを見せにゆく　酔々

こつそりとパズルに凝っている社長　維久子

臆病な恋がパズルに似た綴り　百酒

老化する頭試してみるパズル　形水

スラスラとパズルが解けてうまい酒　一栄

パズルめく隘路で女にささやかれ　静馬

家裁まで行って夫婦のパズル解く　智子

パズルに似た女の神経もて余し　君子

パズル解く度に人間まるくなる　重人

バラバラのパズルを足で解く刑事　千万子

念入れてパズルの落し穴に落ち　右近

落し穴探るスリルもあるパズル　柳志

兼題「聴診器」　菊沢小松園選

聴診器胸のうずきは聞き落し　あいき

聴診器で泣く児くすぐる小児科医　章雅

聴診器家族を早く呼べと言う　福水

聴診器先生お義理のように当て　どんたく

見破った仮病に温い聴診器　弘生

お診立てのよい聴診器うたがわず　曲ん手

仁術を忘れて光る聴診器　宗義

聴診器恋の病いは聞きとれず　茶人

聴診器やいとの跡でふととまり　登美也

聴診器早い運びにある安堵　清女

永宗宗義
川柳句集

高瀬舟

価　三百円
送　七十円

四月新学期会員募集

毎週水曜日　月四回
よる6時30分―8時30分
六カ月で初等科修了
（規則書無料送る）

大阪市南区大宝寺中之町一
〒542　誓得寺内
関西奇術教室

事故現場もう間にあわぬ聴診器　踏草

むつかしい顔でエッチな聴診器　柳信

聴診器胸の鼓動もキャッチする　雪美

聴診器ただ風邪ですと言っただけ　祥月

聴診器当てて一言痛さ消え　藤持

聴診器おめでたですと軽く言い　一栄

女医さんはぬくめてくれる聴診器　トメ子

眷属の祈り集めて聴診器　みどり

心臓と話している聴診器　庸佑

聴診器時には愚痴も聞いてやり　柳宏子

聴診器シャツの汚れも診てしまう　美幸

産ませるか堕すか迷う聴診器　柳志

聴診器の役得美女をまだ脱がせ　一三夫

聴診器話せぬ音を探り当て　十止庵

聴診器暮しの音もきかされる　花梢

聴診器気になるとこでフト止り　多久志

聴診器まぶしいような胸をあけ　花梢

本当のことを知ってる聴診器　庸佑

聴診器掛ければ医者の顔となり　吸江

聴診器戸惑うような肌に逢い　文秋

聴診器米寿を保証してくれる　智子

聴診器癒えることのみ信じ切り　智子

聴診器笑ろて何んにも言いはらず　素郎

聴診器やいとのあとはよけていく　度

美しい乳房押える聴診器　綾女

念入りにされて気になる聴診器　重人

やわ肌の血潮を聴診器にきかれ　栞

聴診器血を通わせて儲からず　美幸

親の目が食い入るように聴診器　多久志

聴診器きれいな嘘で元気づけ　鬼遊

百歳はこんな音かと聴診器　一舟

死にとうない音を知ってる聴診器　悦郎

聴診器名医もおなじとこに当て　十止庵

血の通う聴診器となり持ちかえる　小松園

（河井庸佑・整理）

★

「筋目たつとき」について

室山　三柳

本誌に連載中の「誹風柳多留廿五篇研究」は、清博美氏に輪講の原稿の整理編集をお願いして川柳塔社へ送っていただいている。輪講では説明が長く、また例証・引用も多く、紙幅の関係上そうしなければ掲載不可能であるからである。したがって、輪講参加者の一員として、清氏のご労苦には深謝の意を表する次第である。

ただ二月号の、―75　ついちまで筋めたつとき大地也―　の、わたしの意見の後半が省略されたため、「筋目」についてはっきりしないきらいがあるのではないかと思い、左に補記しておきたい。

「筋目」は、「ついち（築泥―つきひぢ―の約）」に入れてある線をいい、京都御所はもとより門跡寺等にも入れるものである。青木氏が「上野寛永寺か」とされているのは、同寺が門跡寺であるからである。これについては、わたしも一応それをあげてはみたが、それでは「大地」がおかしく、「筋目たつとき」「ついち」はやはり皇居の土塀とみたいと思う。

雅号ぶっちゃけばなし（138）

はらだ

めいしゅん

原田明春

本名を明春（あきはる）（長州・萩の産）三月生れで明るく春の如しそんな意味で命名、女ばかり続けて七人、親父殿産声聞く度に煙草を絶ち、神仏に願掛け念力の一発をかませ、幸か不幸か、命中、生まれて来たのが私である。親父より産婆が腰を抜かしたとか、軍艦ばかり手掛けて来ただけに。まさか、大砲を備えて来るとは、間違いではないかと産婆と親父殿、何度も撫で廻し引ぱって見たとか、それから親父殿は勿論、家中が明るく春が来たようになったとか、味を覚えて続けて男が三人、雅号は明春をそのまま読み替え「メイシュン」という。

川柳へ生まれたような雅号（なまえ）つけ

大正十二年三月二五日生（**五一歳**）

職業　裁判所事務官（地区交通指導員）

▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

川柳後楽（岡山県）　井上柳五郎報

寡婦の道真珠は冷めたい眼でみつめ　照路
冷えかけた愛へ真珠が空しすぎ　文平
ケーキ切る切る指の真珠ふるえとり　岡谷
空閨を癒す真珠は夜光り　鮫虎狠
こづかい銭ねだるロ実勉強し　照路
口実が本当になる風邪をひき　清路
口実を探す眼が宙に浮き　たけ志
口実を見つけて石につまずき　宗義
見え透いたロ実うなずきながら聞き　胡風
拝みたい気持で最後の場所に座し　博友
賽銭を忘れて拝むだけ拝み　天竜
拝まれる骨となっての人の価値　柳五郎
金包の重さで拝む声変り　一声
地獄に仏拝む両手にうそがない　佐加恵
投書らん庶民の文句載せきれず　秋月
名文句活弁めいている祝詞　葵丘
気を悪くするなと文句並べたて　陽子
転勤をことわるロ実妻にきき　楽遊
三十年真珠の指輪新らにする　久米雄

川柳しんぐう　大矢　十郎報

閉山の空家に夢が捨ててある　雀踊子
帰った方が良さそうな客は時分を捜し出す　凡九郎
寒い風持って来客あらわれる　まさ子
秋に追われて案山子に帰るとこがない　牧人
追い越してしまえばつまらない相手　とよ子
追いつめてからの刑事の眼がやさし　大輪
転居先言わぬ空家のみたドラマ　武雄
漁絶えて番屋は雪の積るまま　照子
貼り方を教える母もまだ未熟　としよ
立ち退きをせまられている障子貼る　よしほ
追いつけぬ距離の哀しき一周忌　千寿子
すき間風防ぐ目貼りの侘び住い　入道
青い鳥みんな追ってる疲れてる　金松
追いついて追い越し執念まだ炎える　太茂津
年の瀬に値札また又貼り替える　溪水
孫追って叱って一日丁度良し　富子
借り手ない空家へ変な噂立ち　与史
永久に変らぬ愛の写真貼る　明
月賦追う暮しへいつか慣れてくる　豊水
どんな人来たのか空家に灯がともり　一郎
落選の顔貼ったままさらし首　十郎

菜の花句会　大路　美幸報

それぞれの模様に染めて生きる街　維久子
横着が出来ず四角の中に生き　正彰
考えて考えて一本の葦になる　静歩
もの言えば叱られそうな荒模様　文秋
横道にそれねばならぬ人に逢い　吸江
交叉点十字架描く人模様　美幸
広告がひと足早く春にする　弥生
考えも及ばぬ知恵が子から出る　紀美代
ひと息を入れて考えることにする　季賛
横向いたままの相手に気を遣い　綾女
言訳けの考えつかず廻り道　夕女
賽銭の模様を変えた小粒銭　悦郎
順調にはかどる裏を考える　肖二
考えの違い僕から自我を折る　喜風
鮫鰊がブツ切りされる雪模様　牧人
横座り女それから強くなり　美代
考える女の胸にある鉛　酔々
横道にそれて古傷埋めていく　花梢
考えの死角で犯人あざ嗤う　史子
横にいる妻の美しさを知らぬ　十止庵

むらくも川柳会　小砂　白汀報

共稼ぎ北風吹きまく日もぬくい　敏明
北風が気になるひより畑仕事　忠治
来年も何かせわしい計を立て　健朗
来年も生きるつもりの暦買う　英子
北風へ母が差し出す防寒着　福子
北風がサッシの窓へ体当り　一葉
黒髪のあった写真を見せたがり　蓮露
来年へかけて幸せ逃がすまい　文子
来年を待たで産婦の里帰えり　孝華
来年にすべてをかけて蕎麦を食う　一郎
北風の意地悪据をもてあそぶ　秀子
白鳥の姿で北風舞いおりる　白汀
日本髪不況をしばし忘れさせ　明朗
配達の子は北風を突いて出る　冬樹

南大阪川柳会　金井　文秋報

人生の起伏抜け駈けされる日も　雀踊子
抜け駈けを嫌う明治の母でよし　あいき
出し抜いてゴメンと結婚した便り　滋雀
抜け駈けの恋語り草子が五人　美幸
抜け駈けの記事差し止めた札の束　綾女
技術屋の腹にぶらぶら守り札　一舟
変人で通せる技術持っている　文秋
小手先の技術模倣を売っている　肖二
工大を出した技術の出来ぞこね　宗義
パチンコも技術のうちにして自慢　一栄
新入社先ず異性から評価され　静香
隣席の女異性と見ない老い　好郎
老いてなお異性は異性としての距離　正彰
手作りの手垢をあえてぬぐわない　古方
握り合った掌だったとは消えた過去　凡九郎

肩の荷が重い実印握ってる　智子
善人の怒りは石を握るだけ　十止庵
再会の言葉にならぬ手の温み　頂留子
吊皮を握る暮しに来る焦り　誓二
抜けがけの恋はこんなに燃えるもの　克美

川柳東大阪　竹中　肖二報

夏風邪が木犀の咲く頃なおり　肖二
夏風邪を引いたが紳がくしゃみする　古方
夏風邪を裸で癒すのも若さ　喜風
夏風邪を恥かしそうに新世帯　儀一
寝相が悪いおやおまへん夏の風邪　凡九郎
度が過ぎた父のパンチが子をゆがめ　綾女
一発のパンチで父の座を守る　十止庵
パンチある男と社長に見込まれる　三十四
パンチ一発PTAにわめかれる　恒明
パンチがどうのと茶の間の審査員　あいき
さすが老妓パンチの利いた撥捌き　一栄
陽当りへ老母と猫と孫和む　好一
太陽熱が沸かして呉れたうちの風呂　誓二
せっかちが血圧上げる歩道橋　柳信
せっかちに事を運んで叱られる　季賛
足音へ座り直したミニの膝　思月
落選の足音ダルマが聞いている　重人
越境のバラの野心は刈りとられ　柳宏子
謙譲の美徳野心に出し抜かれ　文秋
落選のインタビューにもまだ野心　維久子

川柳たましま　稲田　豊作報

白菊のあくまで白く黄昏れる　三辛堂
本棚に父の悲哀が置いてある　八笑人
妻のサインで夫は歩くことに慣れ　成行
人間に戻すひと皮むいでやり　千翁
宮参り裾が気になる七五三　流風
インフレに拗ねて列車が遅くなる　豊作
五十坂妻のサインに無駄がない　梁水
インフレですからと今日もカレーにし　林鶴
これがまあ浪花の味かハモの皮　朝二
冬が追いかけて来る老人がつかまる　皷草
善行をしるす手帳は温かい　誠一
本当のことです金のない話　幹定
インフレと戦う夫の靴磨く　慶子
本当の心は本棚に置いてある　澄子
道楽の果てに頭を刈りました　克枝
知名度でサインの色紙額になり　佳志緒
手伝いを許さぬ祖父の障子貼り　麗水
静かなる他界洩れ聞く小春の日　安静
何もかも本当言うて過去持たず　武子

川柳わかやま　野村太茂津報

どの嘘もみな見抜かれる年の暮　大輪
招かない客に茶の間の和が崩れ　マサ子
和を願う別れの嘘が美しい　雀踊子
貧しさに触れずに囲む丸い膳　好郎
産声を待つ赤飯の水を替え　白光子
産声をあげてたらいを蹴る力　佐知子
誕生日祝うてくれる子もおらず　福水
うっかりしていたのか又生まれ　柳志
商売繁昌と見える師走の無精ひげ　武雄
一息に消すにはローソク多過ぎる　英子
十二月八日とは妙な日に生まれ　十郎
赤旗も気勢揚らぬ年の暮　柳宏子
初孫へ明るい話題年の暮　千寿子
すし詰めの帰省へ母と餅の顔　としよ
しやか如来の顔して孫の生誕す　与史
解禁が山の平和を脅やかす　冨江
商売繁昌と見える師走の無精ひげ　嘉之
一息に消すにはローソク多過ぎる　道夫
十二月八日とは妙な日に生まれ　万作
赤旗も気勢揚らぬ年の暮　凡九郎
初孫へ明るい話題年の暮　太茂津
すし詰めの帰省へ母と餅の顔　松緑
しやか如来の顔して孫の生誕す
解禁が山の平和を脅やかす
暮の用新幹線で追いかける
年の暮日めくり二枚めくられる
ウインドの晴着へ母娘の夢を捨て
和ごますゆがますそんな金そんな金
山茶花にせかされ正月へ庭も掃き

川柳たけはら　森井　菁居報

思い出を追ってよく似た人に逢い　鬼焼
旅ひとり男に酒の味がある　静水
歯を二本抜かれて俺も五十八　房子
値上りの時世に勿体ない空気　不朽
病む指の風にもながれそう指紋　文晴
ゴキブリのひよろ〳〵と冬がくる　笑子
足の裏こんな大きな人だった　蘭幸
すぐ顔に出す幸福な人であり　菁居
バイトロ捜す週休二日制　そのみ
一万円くずせば羽がはえて飛び　愛
あたらしいパジャマいいゆめを見る　千百合
たかが百年くよくよするなと言い聞かせ　紫光
菊花展月天心の酔の中　のばら
出る釘は打たねばならぬ破邪のベン　貞子
マンネリの日々こわしたい日の鏡　かつ子
もうこれで安心と言う日の涙　英詩
平社員の中の古参で気が疲れ　一路
割り切って見たい気もする戦中派　酉合
読み終るまでの時間が凍ってる

佳句地10選（前月号から）

植山武助選

長男の重さを配る鏡餅　千翁
この網をたぐると政治が見えてくる　林鶴
踏切の途中で米の底が抜け　鬼遊
暦には書いてなかった別れの日　夕花
野の草を食べた昔は蒼い空　満津子
主義のない男と思う丸い背ナ　肖二
ガム噛んでおやじの主義へ無表情　一栄
天皇にいつまでもあるカマドの火　岳人
鉄の火と芒の炎男と女　薫風
燃えつきていない証拠は風を待ち　小松園

青春の傑作だった妻と老い　扇水
底辺の暮しになれた倖があり　季賛

吉永川柳社（岡山県）　平井三与子報

企らみがあるとも知れぬセリフ聞く　恵美子
功成った余生年金積み上げる　宗義
冗談も言わず紋付かしこより　浄美
冗談を本気で怒るのに困り　芳月
首筋へ小使いせびる係の顔　水仙
肉の筋わたしは小さい声で買い　柳子
冗談が師走の町で叱られる　芳明
病室の冗談さえも気が付かず　暉生
仲人は冗談話で教えとり　正州
大筋で合意それからまとまらず　秋月
煮え返る心は見せぬ握手する　草二
内心は折れるつもりの父の意志　三与子
内心にふれまい傷が深いから　伊久野
残業を愛のあふれる鍋が待ち　一声
賽銭箱だけは値上と書いてなし　武夫
ほめられて怒りますよと目が笑い　胡風
逃げるしか知らぬ兎の平和主義　久米雄
家中で分ける御慶の束が着き　和海

堺・若芽合同句会　草春報

福引は石鹸一個で泡となり　季賛
等外のおまけ子らに人気あり　草春
一等をひけば買物タダになり　育園
末席でさくら拍手の頃を待ち　一舟
ほのほ燃えほのほが走る血が走る　祥月
小走りの女へ犬もついて行き　摩天郎
ブレーキを気にして走る齢になり　天笑
何思ったのか小走りになっていた　つき子
年毎に小さくなりし鏡餅　柳影
喜怒哀楽みんな鏡に見透かされ　清女
三面鏡女たびたび向を替え　徳子
鏡代りに車の窓で見るモード　茂美
石ころの肌にみつけた陽の温み　一二三
石ころの丸さを愛しひろい上げ　宏子
福引をひいてレンジが二個になり　昌美
たまさかに買えば福引大当り　藤持
福引に釣られる女房平和な日　柳信
くじ運が強いと出かけ飴一つ　千万子
喰い逃げの出るほど食堂よくはやり　笑痴
食堂の窓へ焼芋屋の匂い　小松園
大衆と云う名食堂にある和み　凡九郎

京都・塔の会　松川杜的報

情報化時代兎の地獄耳　三求
明けてゆく出雲の春は兎から　笛珠
兎狩り兎の速さしっただけ　求芽
童話の兎はインフレ乗り切れず　和友
おらが春兎は長い耳を立て　飛鳥
月世界兎の住めぬ世と変り　誠史
兎の目因幡の神話で泣いたまま　王石
第三の人生履歴書の職がなし　季賛
何もかも未完のまま年をとり　明代
周易に曰く卯年の子沢山　蘇堂
野兎の眼に郷愁の雲がゆく　水客
還暦へ赤い兎の版画買う　杜的

まるべに川柳会（大阪市）　村田瓢太報

物価高ますます買物うまくなり　幸子
ひたむきな窓振られても振られても　一世
初夢を見ないでなぜかホットする　寿子
落ちついて飲める楽しさ三カ日　星斗
元旦の決意お屠蘇で薄められ　茂児
落ちついているを女房歯痒ゆがり　立児
ひたむきに過疎のふるさと守る鍬　好郎
はりこんで仰山願うた初詣で　瓢太

和歌山七面句会　中筋三幸報

松の内何おちつかぬ年令になり　平雄
無人島に逃げたく思う日の焦り　太茂津
弟の嫁が島から来ると手紙　政夫
千両普請施主によく似た鬼瓦　凡峰
子を叱る母は鬼の面かぶり　富子
仕事の鬼で団欒を知らず老い　しずえ
鬼瓦だけがじまんの里の家　知也
松の内過ぎてけだるき我が心　勇次
島だけに残る言葉でもてなされ　ふく代
美人でもどこか鬼面をちらつかせ　光治
島国の一億の群れ動きすぎ　武雄
鬼瓦雨の孤独に泣いている　凡夫
松の内すんで貧乏始まりぬ　其夕
雲だけが動いて見える松の内　康浩
真白のエプロン姑の松の内　淳子
二枚舌多くなりたり鬼多忙　三幸

城北明朗句会　川口弘生報

バーの灯のルクス野心を誘い出す　十止庵
ルシャナ仏そろそろお昼近うなり　静歩
末っ子がこき使われる母の留守　智子
読む本のある留守番は苦にならず　弘生
ルールには明るく実情には暗く　百酒
ルールからはみ出す人でもてあまし　繁子
風に誘われ雲は流浪の旅に出る　牧人
来客へ留守に出来ない十二月　柳信
累積赤字で投げだしたい家計簿　誓二
ルンペンへ銀杏並木も散りかかり　故鉄児
留守番の電話叱言も録音し　右近
留守勝ちな集金人をホッとさせ　喜洗
当然のようにノーベル賞を受け　春巣
六十路もう爺馬鹿になりきって　三十四
ダンプカーめし屋の前で入れ替り　喜代子
空地あり子供の遊ぶ空地なし　生仏
流行を追えば月賦がついてくる　駒子
住民パワー益々エゴに発展し　つね
里に菊、山に紅葉の秋かおる　秀村

川柳ささやま　河原みのる報

大勢の眼モナリザは眼を変えず　越山
大勢の中にノッポもまぎれ込み　素水

陳情団お国訛をはばからず　宗珠
大勢の見送る中に目立つ人　八陣
かげ口の火種は深う埋めておこ　とも子
灰深く消えぬ火種におしえられ　れい子
大文字陶酔の闇に火種消ゆ　百合子
人生のドラマ笑える日が足りず　とおる
もひとりの私をドラマの中に置き　可住
テレビドラマ見て昂ぶりに堪えた夜　つや子
今日も書く主婦のドラマに日が暮れる　とんぼ
筋書きは神だけ知っているドラマ　みのる
犬猿の仲で交代する首長　英断
一パイの席だけ男が交代し　をさむ
交代の上り列車が薄化粧　千代子
改築へ近所がやりくり心配し　近江
やりくりを市場籠にも云いきかせ　村雨

オーエスケー川柳会　大坂　形水報

婚約後カレンダー見て待つ心　正人
カレンダーきびしい不況の影もなし　幸太郎
カレンダー不況の風を乗せて行け　健坊
カレンダーめくってみては甘い夢　洋々
カレンダー追って手形の期日決め　博泉
カレンダー吊ってごまかす壁の疵　野生
カレンダーだけはまっ新でスタートし　有一
カリカリと冬季が窓に爪をたて　聖地
やりくりの腕を見せてる恋女房　泉水
やりくりが済んで一息年の暮　栄元
一年を早くに終る忘年会　海一
大晦日終りと初めの鐘がなる　念千
ドラマの終りはみんな旅にでる　夢常
やりくりももうこれまでの十二月　亜成
窓をキャンバスに雲が流るるよ　駒村
やりくりがついた晦日の酒の味　一扇
やりくりを見せずにつくす親孝行　亜也子
心の窓開いて今日も強く生き　形水
裏窓に見えるゴチャ〳〵したくらし　宗珠
裏窓から覗いてみたい地球の裏　弥生
カレンダーにチェックして置く秘密持つ　入仙
やりくりを見ている方も気が疲れ　好郎

川柳大阪　児島与呂志報

故障でも休んで居れぬ我が家計　京介
恋仇もしやと思う長電話　胡蝶
二次会のグループ別室へソット消え　喜水
すがすがしい朝をグループ掃き清め　楽々
金脈をあばいた残本ありまへん　眉水
レッスンのきびしさ源水の独楽が生き　六竜子
眼やかに娘はグループで旅に立ち　武松
宴会の虎が見舞いに来てくれる　凡々
嫁がせてからもあれこれ親心　雅巣
売り出しの旗は無情の風へ泣く　漁人
雑談はお得意挨拶せぬヤング　秀峰
グループを組めば云いたい事が云え　道子
古本屋生き字引きのような顔でいる　笑風
自縛の縄が感情が先走り　重人
独り身の足よごれたまま朝を出る　洛酔
週末の駅は百鬼夜行の恋が待ち　敏
芸人の玉子へ親の七光り　徹舟
ガソリンの切れたところで乗り捨る　本蔭棒
制服のままで腹へった腹へった　与呂志

南海電鉄川柳会（大阪市）　辻圭水報

苦情きく時は敬語の小役人　十止庵
苦情にも両方立てる人不足　柳信
機械化の苦情は人が聞いてくれ　圭水
苦情ばかしならべ女の忘れ物　摩天郎
エゴの世が苦情のるつぼにしてしまい　宏子
味のある苦情で痛いとこ突かれ　儀一
苦情言う自分の事は棚に上げ　誓二
苦情きく方も同情苦情言い　保夫
窓口は今日も苦情を聞き飽きる　肖二
おごそかに苦情賜わる顔を出し　川狂子
窓口の苦情へ役所そっけなし　鎮彦

虹川柳倶楽部　回天子報

入口で戸惑う句会の初参加　三男
口答え少しオシャマなテレビッ子　五木
反省は社長につけたデモの疵　勝一
注連縄にかしわ手をうつ御神木　広坊
新嫁の料理時々メモをする　一竿
狂人の日記メモから罪がばれ　為幸
山道のにおい昔を呼びもどし　実
山道に恥を捨て行くゴミの山　昭沖
菊作り丹精こめて駅で見せ　三日造
不景気で夏の休みが長くとれ　久隆
番組が読めてチャンネル孫がとり　余志郎
墨の香も一年ぶりに賀状書く　静畔
もう一度メモに念押す委員長　秋醇
石炭の元は樹木という不思議　誠
メモにあるアンゴー警察強く突き　回天子

岸和田川柳会　植山　武助報

まあ一度使ってと無理において行き　南風郎
角とれて無理な話を丸納め　加仙
マネキンの帯はお客に背をむけ　つゆ子
岩田帯しめて気持も親となり　千代
帯結ぶ手も不自由なり母の老い　静芳
知らぬ振りしてる背中を叩かれる　葛城
ふる里は知らないふりをしてくれる　幸代
合鍵を預ったためうたぐられ　有雅
合鍵をいじくっている二号の子　勝晴
松の内やっぱり母の割烹着　春栄
本心を知りたい合鍵借り歩き　武助
合鍵を互に持ったまま別れ　香珠夫
許す気を秘めて合鍵だけ託し　たけし
美しい音色流して清掃車　操子
知らぬふりして通った友の肩淋し　歌子

★「お願い」―このページの行数は25行詰のところ35行にして印刷所を泣かせています。文字数は20字詰なので句は十七字以内のを選出していただきとうございます。―編集部

本社三月句会

日時　三月七日（金）午後六時
会場　以和貴荘（いわきそう）
阿倍野区松崎町二丁目
電話６２２・１２７５番

兼題　柳話　西尾栞
「縄」・高杉鬼遊選
「追求」金井文秋選
「細工」戸田古方選
「活動」川村好郎選
（今月の出題・河内天笑）

席題　二題　当日発表
会費　三百円　各題三句以内厳守

★投句だけの方は切手百円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷中之町20
川柳塔社

4月の兼題［息子］［城］［蹴る］［塗る］

以和貴荘へ帰りました

募集

五月号発表（3月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）菊沢小松園選
課題吟（各題5句以内）
「夫婦」河野君子選
「植木」林野甦光選
「鯉のぼり」田垣方大選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

六月号発表（4月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）菊沢小松園選
課題吟（各題5句以内）
「環境」斎藤三十四選
「傘」磯部与志選
「目減り」弘津柳慶選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳美をご使用ください。

「愛染帳」は毎月15日締切

定価三百円（送料十六円）
半年分　千八百五十円（送料共）
一年分　三千六百円（送料共）
昭和五十年二月二十五日印刷
昭和五十年三月一日発行
編集兼発行人　中島蓬太郎
大阪市南区鰻谷中之町二〇番地
印刷所　藤原童心社
大阪市南区鰻谷中之町二〇番地
郵便番号　542
発行所　川柳塔社
電話大阪・二七一―三九五五番
振替口座　大阪・三三三六八番

何を選んでいたゞくかは先様におねがいしてタカシマヤの商品券をお贈りするのも心にくい贈物かと存じます
一〇〇円から一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都3店に共通です
大阪・なんば・日本橋・四条
東京・京都
高島屋

・ペンペン草・

★薫風さんのおかげで魅力の座談会をお届けすることができた。まだこのほかに副産物？といっては失礼だが、整理すると好読み物がもう一つや二つお目にかけることができそうである。各社のすごいサムライが群れなして集ってくださったからだ。

★次号は「一頁の句集」を特集する。川柳塔に改題してから個人句集を出した人たちにご登場ねがうわけだが、女性作家は西出一栄さんだけである。そういえばぼくの知るかぎりでは、女性の句集は「ねっくれす」だけ。

★四月号にはスペースの都合で8氏よりご登場ねがえないが、機をみてまたこの特集をやってみたい。

★「川柳雑誌」時代に、正本水客、黒川紫香、丸尾（若柳）潮花三氏の「三人」が出た。評判の良い句集だった。今でも女の方が三人五人で合同句集を出せばユニークな本ができるのではないか。最近の短詩型文学へ女性の進出は目ざましいものがあるのに、句集となるとおしさかさびしい気がする。

★本号は女性の月であり「一路集」は高橋操子、西出一栄、藤村〆女のみなさんにご登場ねがった。

★昭和三十二年三月号の表紙で、路郎先生と意見の食い違いから、その絵を書き直すとこまで話がこじれたことがあった。ちょっと見るとわからないが、絵は黒ベタに白の線描きの抽象画とまではいかぬが、目があり、その真下に乳房が二つそして右足を曲げ、左足は立て膝にしていて、蝶が二ひきとんでいる。野尻弘画伯の作品である。

★路郎先生は、あまりにも大胆すぎて、あとで物議をかもしては困るとおっしゃるのである。ぼくはこの表紙絵に惚れこんでしまったのだ。ゼヒともこれでやらせてほしいとお願いしたものである。で、先生も、不承ぶしょうOKされたことだが、本が出来ても誰からもこの表紙に文句をいってくる人はなかった。そればころが水客さんから「三月号の花瓶の表紙は斬新だった」とおほめをいただいた。なるほどそういわれてみると花瓶にも見えたから愉快な思い出である。

★当時の印刷所は中尾藻介さんのおられた大阪刑務所だった。収容者（囚人）にシゲキを与えぬよう、女性の写真一枚入れるにも先生は気を使っておられたのである。だからあの裸婦像に反対されたのだが、その時ぼくはドエライ失敗をしてしまったことがある。

★路郎先生は割りつけの裏へ白紙の裏張りをされていた。そんなことをしなくてもよいのだが、万一、まちがって裏の印刷物を組んでしまわれては、という懸念があったからである。ぼくも命令通りにしていたが、その裏張りに映画館のポスターを使っていた。（当時映画館の売店を経営していた。一度書いたかナ）校正が出るともちろん割りつけもかえってくるのだが、その裏張りがはがされていることがたびたびだった。ぼくは別に怪しまなかったが、これが大きな失敗だったのである。

★その裏張りにポスターの女優の顔や、ストリッパーの写真があった。それを彼らが奪いあいして大喧嘩になったという。担当の警官からそのことを聞かされ、ぼくの不明をわびたことだが、この裏張り事件があった後なら、あの時の表紙絵を先生に対し、あれほどまでにゴムリはぶわなかったとおもう。（不二田一三夫）

食べすぎ・のみすぎに
新タケダ胃腸薬
効能＝食べすぎ、のみすぎ、胸やけ、二日酔い・悪酔いによるむかつき・はきけ・嘔吐に。
☆3号錠…27錠・60錠・150錠　☆顆粒…16包・40包
タケダ

▼葉子コーナー

▼茶店で相席をよく見ますが、20才前後の人は、以前から知り合いのようにすぐ話し合っております。私は羨ましく物欲しげに眺めており、中年だナ、としみじみ思います。せめてジーンズで若返ってます。

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和五十年二月二十五日　印刷
昭和五十年三月一日　発行（毎月一日発行）
川柳塔
三月号
定価　三百円（送料十六円）

南紀　和歌山　四国でのお泊りは

南海電鉄サービスチェーン

《ホテル・旅館》

白浜温泉　忘れえぬ　はまゆうの宿
政府登録国際観光ホテル　ホテルパシフィック
政府登録国際観光旅館　朝日

勝浦温泉　海に浮かぶホテルダイス
政府登録国際観光旅館　中の島

湯峰温泉　山のいで湯で山菜料理
政府登録国際観光旅館　湯の峯荘

和歌山・新和歌浦　海岸美が楽しめる
政府登録国際観光旅館　萬波

徳島・鳴門　うずしおの宿
政府登録国際観光旅館　鳴門
政府登録国際観光旅館　鳴門公園ホテル

紀北・橋本　ゴルフの宿で季節料理
観光旅館　紀の川苑

大阪・泉南淡輪　魚つりにゴルフに
観光旅館　淡の輪苑

大阪・なんば　清楚で近代的なホテル
ホテル南海

お問合せ・お申込み　南海国際旅行・日本交通公社
サービスチェーン大阪案内所
☎06-631-0222

南海電鉄

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ！

豚饅
焼売
焼餃子
豚まんの王様、やき豚入り
叉焼饅

大阪・なんば
蓬莱
TEL(641)0551～2

551

〈出張店〉なんば高島屋／虹のまち鹿鳴／心斎橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
京阪デパート／堂島地下センター／中之島サン・ストアー／なんば新川店／奈良近鉄百貨店